

松山平野における 弥生社会の展開

The Development of Yayoi Society in Matsuyama Plain

柴田昌兎

SHIBATA Shoji

はじめに

①集落・遺跡群

②弥生集落の動態

③紐帯領域の形成と古墳時代への胎動

おわりに

【論文要旨】

西部瀬戸内の松山平野で展開した弥生社会の復元に向けて、本稿では弥生集落の動態を検討したうえでその様相と特質を抽出する。そして密集型大規模拠点集落である文京遺跡や首長居館を擁する樽味四反地遺跡を中心とした久米遺跡群の形成過程を検討することで、松山平野における弥生社会の集団関係、そして古墳時代社会に移ろう首長層の動態について検討する。

まず人間が社会生活を営む空間そのものを表している概念として「集落」ととらえたうえで、その一部である弥生時代遺跡を抽出した。そして河川・扇状地などの地形的完結性のなかで遺跡が分布する一定の範囲を「遺跡群」と呼称する。松山平野では8個の遺跡群を設定することができる。

弥生集落は、まず前期前葉に海岸部に出現し、前期末から中期前葉にかけて遺跡数が増加、一部に環壕を伴う集落が現れる。そして中期後葉になると全ての遺跡群で集落の展開が認められ、道後城北遺跡群では文京遺跡が出現する。

機能分節した居住空間構成を実現した文京遺跡は、出自の異なる集団が共存することで成立した密集型大規模拠点集落である。そして集落内に居住した首長層は、北部九州を主とした西方社会との交渉を実現させ、威信財や生産財を獲得し、集落内部で金属器やガラス製品生産などを行い、そして平形銅剣を中心とした共同体祭祀を共有することで東方の瀬戸内社会との交流・交渉を実現させたと考えられる。

後期に入ると文京遺跡は突如、解体し、集団は再編成され、後期後半には独立した首長居館を擁する久米遺跡群が新たに階層分化を遂げた突出した地域共同体として台頭する。こうした解体・再編成された後期弥生社会の弥生集落は、久米遺跡群に代表されるいくつかの地域共同体である「紐帯領域」を生成し、松山平野における特定首長を頂点とした地域社会の基盤を形づくり、古墳時代前半期の首長墓形成に関わる地域集団の単位を形成したのである。

【キーワード】 集落、遺跡群、密集型大規模拠点集落、首長居館、紐帯領域

はじめに

四国の西側，西部瀬戸内の伊予灘に面した松山平野は，高縄半島南西部に位置し，重信川や石手川によって形成された東西約20km，南北約17kmの三角形を呈する広大な沖積平野である。この平野は，陸地部分を高縄山塊と石鎚山系，そして出石山地に囲まれていて地形的に完結した景観をつくりあげており，唯一開けた景観を創出する沿岸部は内海を挟んで本州の周防・安芸地域と東九州の豊後地域に接している。以前，私はこうした地勢環境にある松山平野に展開した弥生社会について，弥生集落の動態を中心にその概要をまとめたことがある〔柴田2008b〕。本稿では既出の拙稿に沿いながらそこで記述することができなかつた部分を補記し，さらに弥生時代遺跡の詳細な分布状況とその内容の時間的・空間的動態を再度検討することで弥生集落の特質を抽出する。また併行して中期後葉から後期初頭の密集型大規模拠点集落である文京遺跡の成立から解体に至る過程，そして後期に発展する樽味四反地遺跡を中心とした久米遺跡群内樽味-天山遺跡群の形成過程を検討することで，松山平野における弥生社会の集団関係，そして古墳時代社会に移ろう首長層の動態についても言及していきたい。

①……………集落・遺跡群

「集落」とは何か。一般的には「集落」は居住施設の集合状態を表す用語として使用されることが多い。しかし考古学的には居住施設の集合状態こそ特定することに困難なものはない。まず居住遺構を特定するためには，検出された竪穴建物がどのような機能を有していたか検討しなければならず，工房や炊事場，倉庫などの機能も含めて多角的に検討する必要がある。例え複数の竪穴建物が検出されていたとしてもそれが居住施設の集合状態を現しているとは限らない場合も想定できる。むしろ「集落」とは地理学で指摘があるように「日常の社会生活が展開される空間的な基盤」〔山崎1981〕を現している概念として認識することが重要で，居住空間の中にある竪穴建物はその空間構造を現している遺構と捉えるべきである。つまり，1棟の竪穴建物のみで構成される領域も数十棟で構成される領域も，その空間が構成する景観あるいは機能に差異があるだけで，いずれも人間が社会生活を営むために形成した居住空間の様態を現していることから，それぞれ「集落」として捉えることができるのである。

こうした「集落」の構成要素として挙げられるのが住居や作業小屋，倉や井戸などの居住域をはじめ，水田や畑・水路などの生産域，水さらし場や広場・祭祀空間などの人工空間，そして墓域などである。これについては酒井龍一が居住域の広がる空間を「基本生活領域」，そして生産域や人工空間が広がる範囲を「機能空間」として弥生集落における基本構造モデルを提示している〔酒井1990〕。つまり「集落」の景観とは，基本生活領域や機能空間を中心にそれを取り巻く海や山，そして気候などの自然や心象風景などが，人間活動との関わりのなかで一体化して形成されたものといえる。

ではこうした基本生活領域と機能空間を備えた弥生集落の一角を抽出するために，考古学的には

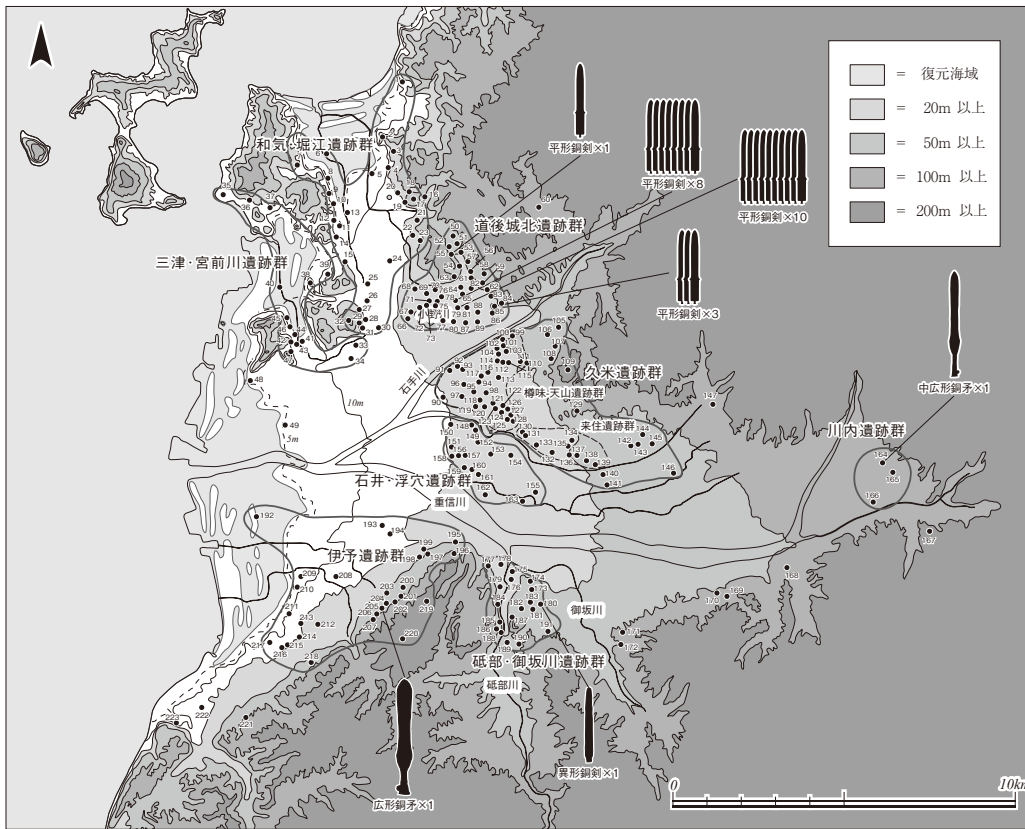


図1 松山平野の弥生時代遺跡と遺跡群

どのような手段を講じることができるのであろうか。松山平野においてもここ数十年の間に調査事例が増えたものの、居住域の構造や、まして集落全体の構造を把握できるような大規模な調査事例は極めて少ないのが現状である。集落の構造面で平野全体を検討することは現時点では困難と言わざるを得ない。ただ毎年積み重ねてきた多くの発掘調査と試掘は、やや地域的に偏りがあるものの結果として遺跡の粗密を現すこととなっている。弥生時代の遺構が検出されているところでは、その密度や機能も検証しなければならないが、基本生活領域か機能空間の一部であることは間違いのない。そして弥生時代の遺物のみが出土するところも、流れ込みなどの二次堆積の可能性を慎重に検討しなければならないが、生産域の可能性も含めて、広い意味での機能空間の一部として捉えても問題はないであろう。このように表採資料を含む過去の調査成果から、認識可能な弥生時代の遺構・遺物が出土している地点、つまり弥生時代遺跡を収集し、基本生活領域と機能空間を特定することが弥生集落の範囲を考える重要なファクターとなる。

こうした抽出作業で得られた弥生時代遺跡は、その分布状況を見てみると自然堤防・砂堆・微高地・水系・扇状地・丘陵などの地形的完結性のなかで経年的な遺構の累積結果として遺跡が集中して分布する一定の範囲を形成することがある。これは自然や地形の変化が起こりうる環境の中で、安定的な基本生活領域を確保するための選地原理が時間を超えて共通する現象で、この一定の範囲に集中して分布する複数の遺跡のまとまりを「遺跡群」と呼称することができる。ただし、遺跡群には長期間の累積結果として遺跡が集中する場合もあるので、必ずしも遺跡群の範囲そのものが集

落域を現すとは限らないことも留意する必要がある。

②……………弥生集落の動態

(1) 松山平野の遺跡群

上述した抽出作業を経て得られた松山平野の弥生時代遺跡は220遺跡(表1-1・2)を超えており、その分布状況には一定のまとまりが認められ、「遺跡群」として抽出することが可能である。

その結果、松山平野では下記に示したように文京遺跡が所在する「道後城北遺跡群」をはじめ、「和気・堀江遺跡群」、「三津・宮前川遺跡群」、「久米遺跡群」、「石井・浮穴遺跡群」、「砥部・御坂川遺跡群」、「伊予遺跡群」、「川内遺跡群」の8つの遺跡群を設定することができる(図1)。以下、遺跡群の地形的環境を中心に概要を述べておこう。

道後城北遺跡群

遺跡群は、現在の石手川右岸、旧石手川によって形成された石手川扇状地の北側、標高30m前後を中心に、東は道後温泉で知られる高縄山系丘陵裾部から始まり、西は独立丘陵で現在は松山城が所在する城山(勝山)の麓付近まで広がり、北は御幸寺山などの南麓付近から祝谷と言う規模の大きな開析谷の奥部まで広がっている。後述する密集型大規模拠点集落である文京遺跡をはじめ、岩崎遺跡や祝谷畑中遺跡など、扇状地を中心に多くの遺跡が分布する東西約2.8km、南北2.5kmの範囲に広がる遺跡群である。遺跡群の縁辺は山塊と石手川によって画されており、特に遺跡群の南側には奈良時代ころまで人工的な開発が入ることのなかった石手川氾濫原が城山の南側裾部まで広がっていることから、石手川南部に広がる遺跡群とは空間的にも隔絶性が高い。一方、西側は後述する和気・堀江遺跡群と隣接しているが、その箇所は扇状地扇端部に当たり、そこに形成された複数の湧泉と旧河道が遺跡群を画していると考えられる。

和気・堀江遺跡群

松山平野の北部には堀江低地あるいは堀江地溝帯と呼ばれる地溝性の低地帯が広がっている。この堀江低地は、かつて石手川が道後城北遺跡群を経て、堀江方面に北流した際に形成された河川の氾濫原と考えられている[平井1989]。弥生時代の当時、現在の海岸部である和気地区には数条の浜堤列が認められ、その後背部はかなり南の方まで入り込んだ入り江状の地形を呈していたものと考えられる。さらに入り江状地形に向かって北流する河川(現在の太田川や旧石手川など)が流れ込み、湿地帯を形成していたものと推察される。これを裏付けるように弥生時代遺跡は浜堤列の上や入り江状地形と氾濫原の周囲に沿って「U」字形の分布形状を呈している。船ヶ谷遺跡や大淵遺跡をはじめ、各遺跡はこうした旧汀線や氾濫原に面して立地する遺跡であり、その分布範囲を和気・堀江遺跡群と呼称する。遺跡群の南側は後述する三津・宮前川遺跡群と隣接しているが、大峰ヶ台から延びる低位丘陵とそれによって流れる宮前川によって画されており、それらに近接して立地する朝美澤遺跡や辻町遺跡などは堀江低地に面していたと推察している。

三津・宮前川遺跡群

三津浜低地から宮前川流域にかけての範囲に広がっている遺跡群で、和気・堀江遺跡群とは経ヶ

表1-2 松山平野における弥生時代遺跡の消長

地域	No.	遺跡名	前期			中期			後期		古墳時代 前期1	
			前期前半	前期中葉	前期後半	前期末	中期前半	中期中葉	中期後半	後期前半		後期後半
石井・浮穴遺跡群	148	東山麓が森古墳群							△	△	△	
	149	東山古墳群							○	○	△	
	150	西石井霊神堂遺跡								△	◎	
	151	石井幼稚園遺跡							○	○	○	
	152	越智遺跡								△	○	
	153	石井東小学校遺跡		○	○					○	○	
	154	今在家遺跡								○	○	
	155	中ノ子I遺跡							△	△	△	
	156	西石井遺跡			△				○	○	○	
	157	東石井遺跡				△			△	△	◎	
	158	古川遺跡		○						○	△	
	159	南中学校構内遺跡			△	△						
	160	居相遺跡								?	?	
161	北井門遺跡		○	○						◎		
162	井門I遺跡								◎	◎		
163	浮穴小学校遺跡・南高井遺跡								○	○		
川内遺跡群	164	宝泉遺跡							○	△	○	
	165	揚り畑遺跡								△	△	
	166	竹の鼻遺跡								△	○	
	167	天神山山頂遺跡								△		
	168	拝志古窯跡								△		
砥部・御坂川遺跡群	169	宇根山遺跡								△		
	170	工平谷遺跡								△		
	171	長生池の上弥生遺物包含地								△		
	172	夫婦池の上遺物包含地								△		
	173	上野遺跡										
	174	土壇原遺跡群		△						△	◎	
	175	高尾田遺跡・目先遺跡			○	○				○	△	
	176	麻生小学校南遺跡		△	△	○				○	△	
	177	拾町山遺跡					△					
	178	水満田遺跡・拾町II遺跡			○	○				○	◎	
179	三角遺跡			○	○							
180	西野I-III遺跡		○	○					◎	○		
181	谷田I-IV遺跡				△	◎						
182	萩原面山古墳群・萩原面山南遺跡								△	◎		
183	萩原面山遺跡									○		
184	長田遺跡								△	△		
185	城ノ向遺跡								○	○		
186	城ノ向古墳群								△	△		
187	大下田弥生遺跡・原町遺跡								○			
188	宮内大塚遺跡								△	△		
189	通谷山古墳					△			△	△		
190	通谷池2号墳								△	△		
191	松ヶ谷遺跡								○			

地域	No.	遺跡名	前期			中期			後期		古墳時代 前期1	
			前期前半	前期中葉	前期後半	前期末	中期前半	中期中葉	中期後半	後期前半		後期後半
伊予遺跡群	192	西古泉遺跡							△	△	△	
	193	宝剣田遺跡		?	?						△	
	194	出作遺跡									△	
	195	八倉窪原庚寺・八倉宮の北遺跡								△		
	196	八倉山遺跡								△		
	197	宮下東谷遺跡		?	?	?						
	198	宮下雨方森遺跡								△	△	
	199	宮下寺山遺跡		?	?	?						
	200	新池遺跡									△	
	201	新池南山遺跡								△	△	
	202	長尾遺跡・上野II遺跡								○	△	
	203	名護池II遺跡・大人塚古墳										
	204	土井池遺跡								△	△	
	205	向山遺跡								△	△	
	206	荒波遺跡								△	△	
	207	本願寺下遺跡								△	△	
	208	上三谷祭古墳								△	△	
	209	平松遺跡								△	△	
	210	横田遺跡		○							○	
	211	下三谷片山・太郎丸遺跡			○	○					○	
	212	下三谷北相遺跡				△						
	213	岩崎池北遺跡								△	△	
214	ケリヤ遺跡									△		
215	西原遺跡								△	△		
216	武之宮遺跡								△	△		
217	六反下遺跡								△	△		
218	内谷遺跡									△		
219	十合遺跡								△	△		
220	田ノ浦I-III遺跡								◎	◎		
221	行遠山遺跡								◎	◎		
222	稲荷南遺跡								△	△		
223	尾崎遺跡								△	△		
224	森遺跡									○		

◎：遺構・遺物が多い
○：遺構・遺物が認められる
△：遺物が確認されている

森（太山寺）丘陵や大峰ヶ台丘陵を挟んで西隣に位置する。現在の海岸部に接する三津浜低地には数条の浜堤列が認められ、その後背部は入り江状の地形を呈し、そこに向かって宮前川が流れ込んでいる。弥生時代遺跡は浜堤列の上や入り江状地形の周囲、そして宮前川流域の自然堤防に沿って分布している。現在の地形ではやや内陸に入り込んだ鳥越遺跡や津田中学校遺跡では大型の漁網錘が比較的多く出土していることから、入り江状の地形は宮前川の中流域まで入り込み、その周辺には汽水域が展開していた可能性も指摘できる。古墳時代初頭前後に外来系土器が多く集積する宮前川北斎院遺跡などもこうした場所に立地しており、港湾性集落としての機能が考えられる〔柴田2006c〕。古照遺跡をはじめ、他の遺跡も旧汀線や宮前川流域沿岸に面して立地しており、その分布範囲を三津・宮前川遺跡群と呼称する。

久米遺跡群

遺跡群は、石手川左岸に形成された石手川扇状地から、更新世段丘（洪積台地）である来住台地を経て小野川右岸に形成された小野川扇状地まで延びる東西約7.5km、南北約3kmの範囲に広がっている。この遺跡群の特徴として、丘陵部から洪積台地と扇状地扇頂・扇央にかけて広範囲に広がって遺跡が分布する傾向があるが、さらにその範囲内でも川附川や堀越川などの小河川によって区切

られた範囲で遺跡の分布に粗密が認められる。特に石手川左岸に沿った石手川扇状地（標高 40m 前後）と更新世段丘（洪積台地）である来住台地上（標高 40m 前後）に弥生時代遺跡が集中している。これらは久米遺跡群内の限定的な範囲に形成された遺跡群であり、前者を樽味四反地遺跡や東本遺跡、釜ノ口遺跡などが分布する「樽味-天山遺跡群」、後者を来住遺跡や久米高畑遺跡などが分布する「来住遺跡群」として抽出することができる。

石井・浮穴遺跡群

久米遺跡群の南側に流れる小野川と松山平野の最大河川である重信川に挟まれた沖積低地に広がっており、遺跡の分布が確認できる高度である標高 20～35m の範囲には、自然河川が網の目状に配され、その間に形成された自然堤防や微高地上に、北井門遺跡をはじめ、西石井遺跡や東石井遺跡などの弥生時代遺跡が立地している。遺跡群は、北西方向約 3.9km、南東方向約 1.5km の範囲に広がっている。この遺跡群は小野川を挟んで久米遺跡群と接しているが、小野川の北側では川に沿うかたちで幅 400～500m の遺跡が検出されない範囲（河川の影響範囲か）が帯状に続くことから、直接的には遺跡の移動や分布が連動しない、隔絶性を有した別の遺跡群として把握した。

砥部・御坂川遺跡群

松山平野を東西に貫流する重信川の南側では、砥部川兩岸と御坂川左岸に所在する洪積台地を中心に河岸段丘が発達し、この段丘から南側の丘陵部にかけて弥生時代遺跡が集中している。この遺跡群では、周囲を流れる砥部川と御坂川の河床で磨製石器の石材である三波川変成帯産出の緑色片岩が多く認められることから、石材獲得に有利な地勢条件が具有されている。遺跡群の範囲はわずか 2.5～3km 四方ではあるが、丘陵上には西野Ⅰ～Ⅲ遺跡や釈迦面山遺跡などが立地し、河岸段丘上には土壇原北遺跡や土壇原Ⅵ遺跡が所在する土壇原遺跡群をはじめ、高尾田遺跡や水満田遺跡などが立地しており、比較的多くの遺跡が集中して分布する傾向が認められる。

伊予遺跡群

砥部・御坂川遺跡群の西側、松山平野の南部に広がる山麓には小規模な河川によって形成された急傾斜の合流扇状地である郡中扇状地が発達し、そしてその前面には伊予灘に面して数条の浜堤列が形成されている。弥生時代遺跡は旧汀線に面した浜堤列上とその後背湿地を隔てて、山塊から延びる丘陵部から扇状地扇端にかけて散在的に分布しており、その範囲は広く、約 6km 四方に及んでいる。遺跡群には浜堤列に立地する西古泉遺跡や旧汀線に面した扇状地扇端付近に形成された比較的規模の大きい横田遺跡などが立地し、扇頂から丘陵部にかけては長尾遺跡などの小規模な丘陵性集落〔柴田 2006b〕が散在的ではあるが多く分布している。丘陵性集落の一つである向山遺跡では松山平野では唯一の広形銅矛が出土している。

川内遺跡群

松山平野の奥部、重信川の上流域には南に向かって傾斜する広大な横河原（重信川）扇状地がある。この扇状地は扇端で湧泉が多いことで知られているが、弥生時代遺跡はこれとは逆に標高 180m 前後の扇頂付近で確認されている。わずかに緩傾斜となった扇頂部に中広形銅矛を伴う宝泉遺跡を中心に、揚り畑遺跡など、数遺跡が径 1.5～2km の範囲に散在して分布している。これを川内遺跡群とした。

(2) 弥生土器編年と段階設定

松山平野の弥生土器編年〔梅木1991・1995・1996・2000・2002a〕を基軸に編年試案とその併行関係を表2で示した。そして土器様式の画期から集落の変遷に段階設定を行うと、次のような8つのステージを設定することができる。まずステージ①は縄文時代晩期後半～前期前葉（梅木編年突帯文Ⅰ・Ⅱ期～前期Ⅰ）、次にステージ②は前期中葉～後葉（梅木編年前期Ⅱ～Ⅲ）、ステージ③は前期末～中期前葉（梅木編年前期Ⅳ～中期Ⅰ）、ステージ④は中期中葉（梅木編年中期Ⅲ）、ステージ⑤は中期後葉（梅木編年中期Ⅲ）、ステージ⑥は後期前半（梅木編年後期Ⅰ-1・2～後期Ⅱ-1の概ね前半）、ステージ⑦は後期後半（梅木編年後期Ⅱ-1・2～概ねⅢ-1）、そしてステージ⑧は古墳時代初頭～前期前葉（概ね梅木編年後期Ⅲ-2～3）である。次節では各ステージにおける弥生時代遺跡の分布状況と遺構や遺物の検出状況を確認し、そこから読み取れる遺跡群の変化と弥生集落の構造を検討していきたい。そしてその時間的、あるいは空間的変遷過程から弥生集落の動態を見ていくことにしよう。

表2 段階設定と弥生土器の併行関係

集落変遷 段階設定	時 期	土器様式 試案	西部瀬戸内	
			梅木編年	松山平野基準資料
①	縄文晩期後半	南溝手河道Ⅰ 津島岡大	突帯文Ⅰ期 突帯文Ⅱ期	大淵A区5層 道後今市10次SK11
	前期前葉	I-1	前期Ⅰ	朝美澤2次Ⅲ層下部・横田
②	前期中葉	I-2	前期Ⅱ	文京4次SB2・山越2次SD2
	前期後葉	I-3	前期Ⅲ	南中学校校内遺跡2次SD1
③	前期末	Ⅱ-1	前期Ⅳ	岩崎環濠
	中期前葉	Ⅲ-2 Ⅲ-3	中期Ⅰ	宮前川別府・祝谷畑中SD02中層
④	中期中葉	Ⅲ	中期Ⅱ	祝谷畑中SD02上層・水満田1号土器溜め
		Ⅳ-1		東雲神社E地点SK1・水満田2号土器溜め
⑤	中期後葉	Ⅳ-2	中期Ⅲ	東雲神社B地点SK1
		Ⅳ-3		文京3次SB01・釈迦面山SB1
⑥	後期前半	V-1	後期Ⅰ-1・2	文京10次SK11・水満田Ⅱ区4号竪穴
		V-2	後期Ⅱ-1	松山大学2次SB7
⑦	後期後半	V-3	後期Ⅱ-2・Ⅲ-1	桑原田中SK1
		V-4		井門Ⅰ4号溝
⑧	古墳前期初頭	Ⅵ	後期Ⅲ-2～3	宮前川北斎院廃棄土坑・西石井1次SD201
	古墳前期前葉	布留0・前期1		宮前川北斎院3号住居

(3) 前期弥生集落の展開

ステージ①：縄文時代晩期後半～前期前葉（図2上段）

板付Ⅱa式に併行し、松山平野で最も古いと思われる弥生土器は、和気・堀江遺跡群の朝美澤遺跡、伊予遺跡群の横田遺跡で比較的まとまって出土している〔梅木2002a〕。いずれも明確な遺構は無く、集落の構造自体はよくわからないものの、その立地に対する選地原理が旧汀線に面した地勢環境であることが共通している。同様の立地傾向は縄文時代晩期突帯文土器に稲作農耕を示す打製石庖丁と半島系彩文土器が共伴した和気・堀江遺跡群内に所在する大淵遺跡でも指摘できる。晩期突帯文土器と松山平野前期前葉の弥生土器との時間的相関関係をどうとらえるかによって、解釈が若干異なってくるが、少なくとも稲作農耕技術の着床は海岸部から始まったことは間違いないだろう。そしてその流入ルートも漠然と沿岸部に到達したわけではなく、現有の資料を見る限り、松山北部で

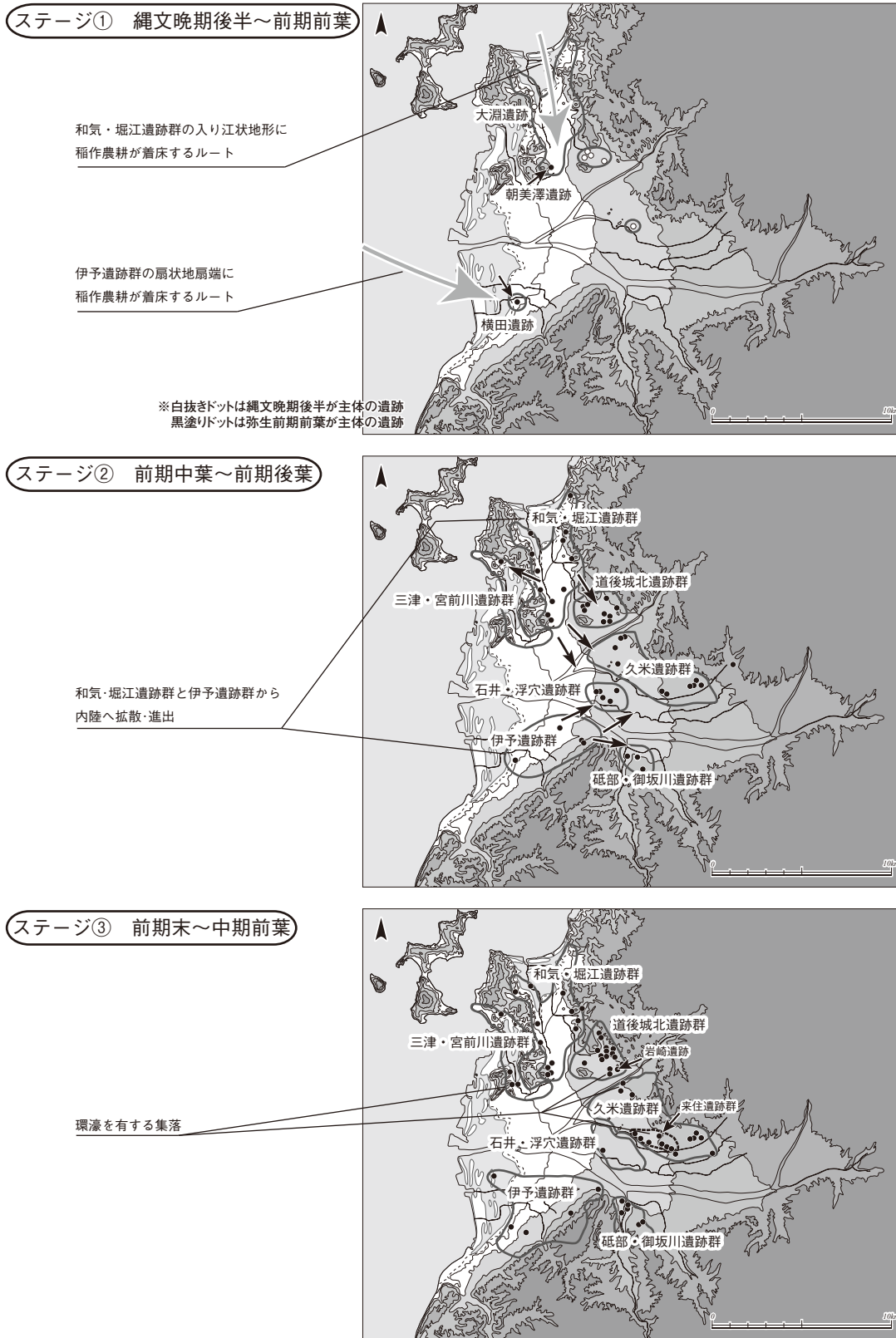


図2 弥生時代遺跡の変遷1

は和気・堀江遺跡群の入り江状の沿岸部、南部では伊予遺跡群の旧汀線に面した扇状地扇端部の2ルートが稲作農耕着床の拠点となった可能性が高い。これに関して、下條信行は松山平野で出土する有柄式磨製石剣の形式別分布に北部と南部で違いがあることを指摘し、伊予遺跡群周辺に初期農耕の上陸地が存在する可能性をすでに論じている〔下條1994〕。こうした下條の分析をふまえると、二つの着床拠点が形成された要因には、それらの地域が海からの新たな技術の定着を恒常的に行いえる安定した地勢的環境が具備されていたことに起因しているのではないだろうか。

一方、縄文時代晩期後半では内陸に入ったところでも突帯文土器が出土している遺跡がいくつか確認されている。これらの遺跡では極微量の前期弥生土器が伴っているものの、その共存も含めた相関関係はよくわかっていない。

ステージ②：前期中葉～後葉（図2中段）

前期中葉から後葉にかけて平野内に集落が散在するようになる。この段階で川内遺跡群を除く、7つの遺跡群すべてに小規模であるが弥生集落の進出が認められる。和気・堀江遺跡群では入り江状地形に沿って座拝坂遺跡など多数の遺跡が分布しており、前段階で主要な稲作農耕の着床拠点であったこの遺跡群は、継続して遺跡の拡散と言うかたちで発展を遂げている。三津・宮前川遺跡群は新たに鶴が峠遺跡に集落が出現し、道後城北遺跡群や久米遺跡群にも多数の遺跡が出現している。前段階に出現した伊予遺跡群の周辺も同様で、新たに石井・浮穴遺跡群や砥部・御坂川遺跡群で遺跡の出現が認められる。

集落の構造までわかる遺跡は少ないものの道後城北遺跡群の文京遺跡では4次調査を中心に21次・24次調査で当該期の遺構が検出されており、微高地上に古期松菊里型住居を含む竪穴建物が散在的に分布し、居住域を形成していたようである。居住域の北側の低地部には灌漑施設と考えられる溝が付設されており、水稲農耕集落の一端を垣間見ることができる〔吉田2003〕。また持田町3丁目遺跡では列状に配置された木棺墓と数基の壺棺墓を中心とする墓域が構築され、副葬小壺や磨製石剣などが副葬されている。列状に配置された土坑墓を中心とした墓域は砥部・御坂川遺跡群の西野Ⅲ遺跡でも検出されている。和気・堀江遺跡群の山越遺跡では木製鋤が出土し、石井・浮穴遺跡群の南中学校遺跡では環濠あるいは感慨用の水路の可能性をもつ溝が見つまっている。先にも述べたように伊予遺跡群では表採資料のため帰属する時期が明確ではないものの有柄式磨製石剣が宝剣田遺跡や宮下東谷遺跡、そして宮下寺山遺跡の3遺跡で確認されており、北部九州との恒常的な交流実態を示している〔下條1991・1994〕。

このような事象から松山平野のほぼ全域で水稲農耕は定着し、北部九州との密接な交流を背景に墓制や大陸系磨製石器を受容した地域社会を形成していたことがわかる。おそらく前段階で出現した和気・堀江遺跡群と伊予遺跡群から分岐するかたちで、水田経営に適している各遺跡群に集落が進出したものと推察する。

この段階の集落は、前段階に比べて遺跡数は増加しているものの各遺跡単位の遺構・遺物の検出量は少ないことから、文京遺跡で検出されたような小規模な単位で経営されたのではないだろうか。松山平野ではこうした小規模な集落が一つの経営単位として各遺跡群内に散在している景観を想定することができる。

(4) 中期弥生集落の展開

ステージ③：前期末～中期前葉（図2下段）

前段階に出現した7つの遺跡群では確実に遺跡数が増加する。特に遺跡の立地環境と検出される遺構に特徴的な変化が認められる。遺跡の立地環境では、前段階から引き続いて扇状地上に立地する遺跡と新たに丘陵裾部あるいは丘陵上に立地する遺跡が出現する。前者では後述する道後城北遺跡群の岩崎遺跡や道後町遺跡、そして久米遺跡群内の来住遺跡群のように広大な基本生活領域を有する集落が認められるようになる。そして遺構では貯蔵穴の顕在化と環濠の出現が大きな特徴として挙げられる。

この段階の遺跡で、普遍的に認められる遺構は貯蔵穴であると言っても過言ではない。和気・堀江遺跡群では標高40mの丘陵上に立地する太山寺経田遺跡で貯蔵穴群が確認されている。また三津・宮前川遺跡群の鶴が峠遺跡では分岐して延びる標高30m前後の丘陵上に貯蔵穴群と堅穴建物状の遺構が検出されている。さらに宮前川に向かって舌状に延びた標高15mの丘陵には斎院烏山遺跡が所在し、その丘陵裾部には環濠が検出されている。そして近接する鳥越遺跡も含めて環濠内外では貯蔵穴群が確認されている。道後城北遺跡群の祝谷畑中遺跡では、明確な居住施設はなく、貯蔵穴の可能性の高い土坑が検出され、幅約12m、深さ約3mの大溝が掘削されている。また、砥部・御坂川遺跡群でも高尾田遺跡や麻生小学校南遺跡で貯蔵穴群が確認されている。

環濠は上述した斎院烏山遺跡をはじめ、久米遺跡群の樽味立添遺跡3次などで検出されているが、いずれも中期前葉には埋没している。こうした環濠を有する集落のなかで、平地に立地し、その構

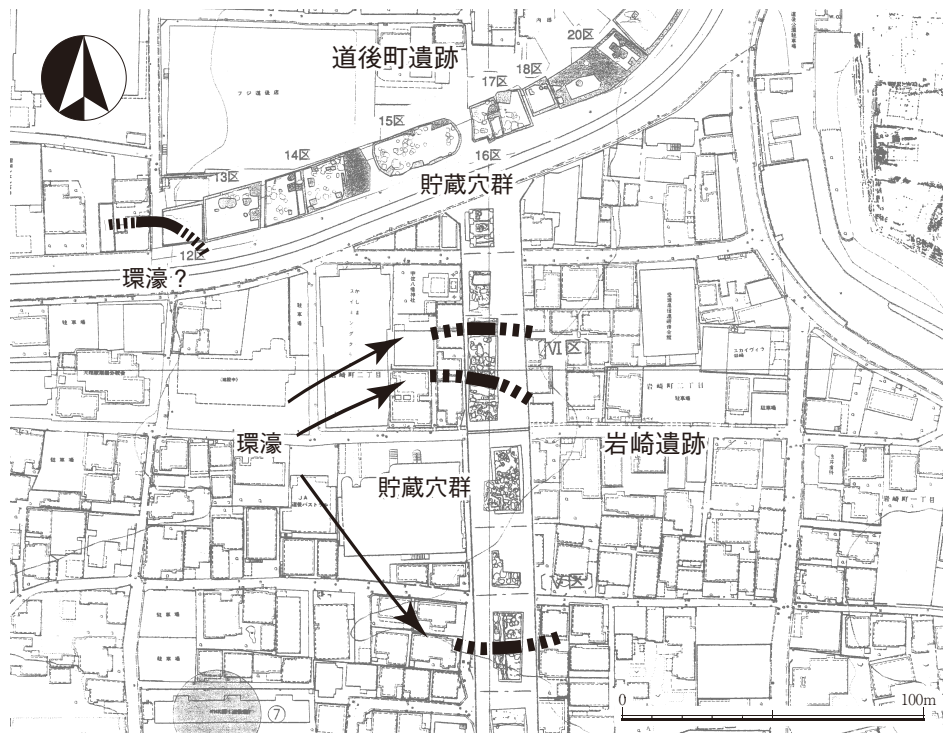


図3 岩崎遺跡と環濠



図4 来住遺跡群と環濠

造がある程度把握できるのが、道後城北遺跡群の岩崎遺跡と道後町遺跡、そして久米遺跡群内の来住遺跡群である。

道後城北遺跡群の岩崎遺跡では2条の環濠が検出されている(図3)。環濠は遅くとも前期後葉に掘削され、中期初頭には埋められており、その間に何回かの再掘削が行われている。環濠の直径は約100mを測り、環濠内の遺構には袋状貯蔵穴など弥生時代前期末～中期初頭の土坑179基が検出されている。環濠の内外とも竪穴建物などの居住遺構は確認されていない。約80m北側には同時期の道後町遺跡が所在し、環濠の可能性のある溝の一部とその溝の外側で貯蔵穴150基あまりが検出されている。集落の範囲は道後町遺跡を含むと南北、東西とも約300mに及んでおり、道後町遺跡検出の溝を積極的に環濠として評価するならば同時期の環濠が集落内に二つは存在していたことになる。検出された環濠とその内外で構築されていた貯蔵穴には土器様式上の時間差は認められないことから、同時併存していたものと考えられる。環濠は集落を区画するものではなく、基本生活領域内の一部を区画していた可能性が高い。

久米遺跡群内の来住遺跡群で当該期の弥生時代遺跡が集中して分布している。来住遺跡群では前期後葉から中期初頭の遺構が久米高畑遺跡を中心に北は堀越川、南は小野川河岸段丘までの南北約500m、東西約700mに及ぶ広大な範囲で検出されている(図4)。実際は舌状に延びた複数の微高地上に貯蔵穴群などの遺構群を形成し、それが集合した状態が広大な範囲に基本生活領域が広がる

集落景観を生成しているものと考えられる。来住遺跡群では前期後葉～中期初頭の環濠が、堀越川に面した久米高畑遺跡 23・25・29・70 次調査で 3 条、小野川河岸段丘に近い来住 V 遺跡・来住廃寺 20 次調査で 2 条確認されており、それぞれの環濠は同時期に併存していた可能性が高い。つまり、集落内に二つの環濠が存在していたことになる。居住域は環濠の中ではなく、その外側で不明瞭な竪穴建物数棟が散在的に確認されているのみである。この遺跡群でも上述の岩崎遺跡同様、環濠の内外に貯蔵穴群の分布が認められる。ただし久米高畑遺跡の環濠内では、上屋構造の復元が可能な小型方形竪穴建物の貯蔵施設が比較的集中していることから、環濠内外の貯蔵施設に質的あるいは機能的格差が存在している可能性が指摘できる。来住遺跡群でも散在する居住施設の空間構成については判然としないが、貯蔵穴群を主体とした集落構成であることは間違いなく、環濠は集落内に取り込まれたかたちで形成されているものと理解することができる [柴田 2006a]。また、基本生活領域が広範囲に広がる要因は、貯蔵穴の構築から機能停止までのサイクルが短く、結果として多量

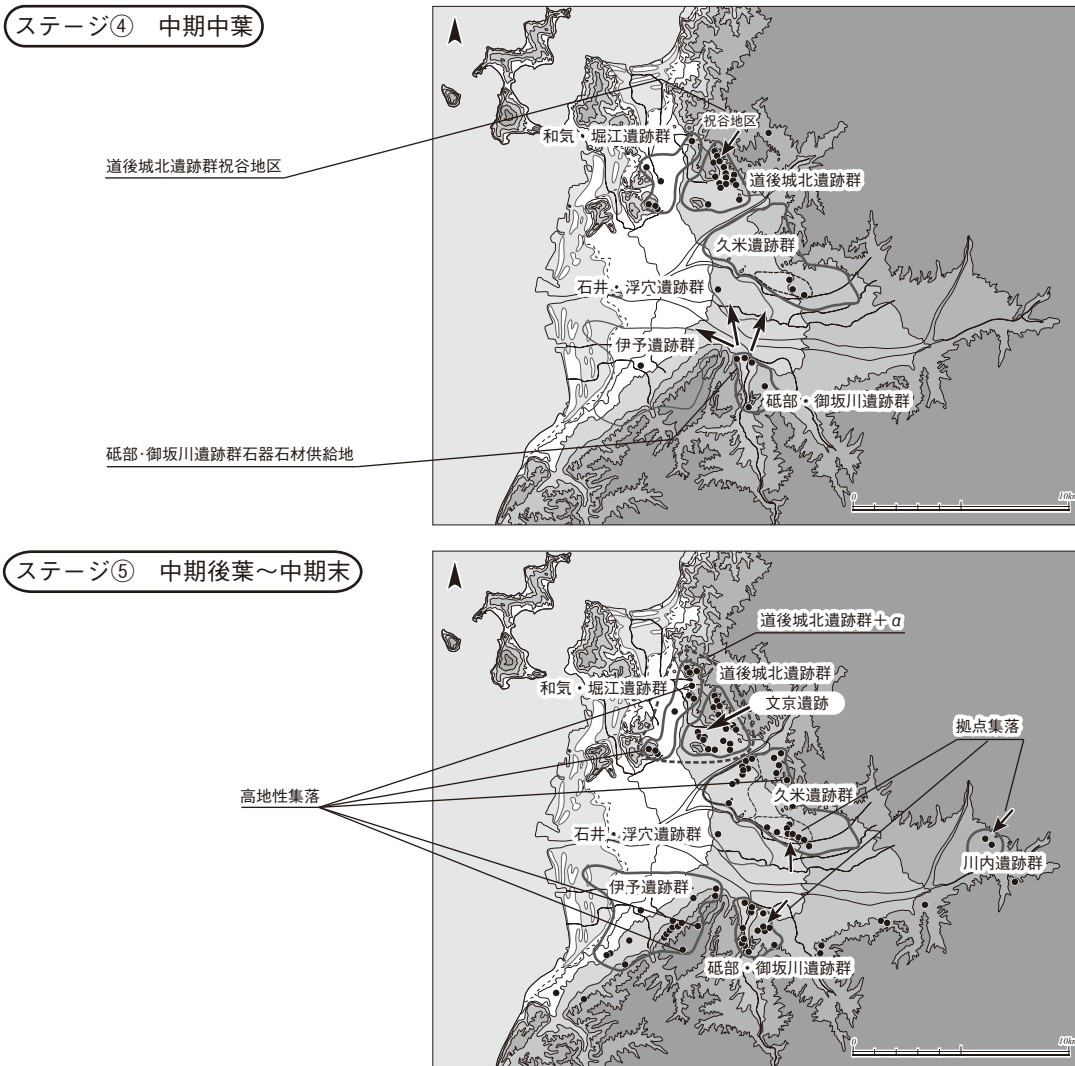


図5 弥生時代遺跡の変遷2

の貯蔵穴を構築することとなり、その領域が拡大した結果ではないだろうか。それと連動して居住域が散在的に広がったものと考えられる。

以上のように前期後葉～末に出現し、中期前葉には廃絶する環濠を伴う集落は、集落内に複数の環濠が存在し、貯蔵穴群の一部を区画する傾向がある。環濠は集落内部の構造物である可能性が高い。また明確な居住遺構が確認できないことも本段階の特徴で、堅穴建物の掘削深度が比較的浅い傾向にあることなど、居住施設の構造の特異性も考慮しなければならない。

ステージ④：中期中葉 (図5上段)

中期中葉には環濠を伴う集落は消滅する。さらにこの段階では各遺跡群で遺跡数の減少が認められる。小規模な集落が各遺跡群内で展開していた可能性は高いが実態は不明である。

一方、全体的に減少傾向にある弥生時代遺跡のなかで、この段階に急増する遺跡群が存在する。それは道後城北遺跡群の祝谷地区と砥部・御坂川遺跡群である。

道後城北遺跡群の祝谷地区は、最大幅約1.3km、奥行き約2kmの祝谷と言う規模の大きな開析谷の各所(丘陵間の谷部・丘陵部)に生活領域を設けて、先述した幅約12mの大溝を維持する祝谷畑中遺跡をはじめ、祝谷アイリ遺跡や祝谷六丁場遺跡、土居窪遺跡など規模の比較的小さい遺跡が

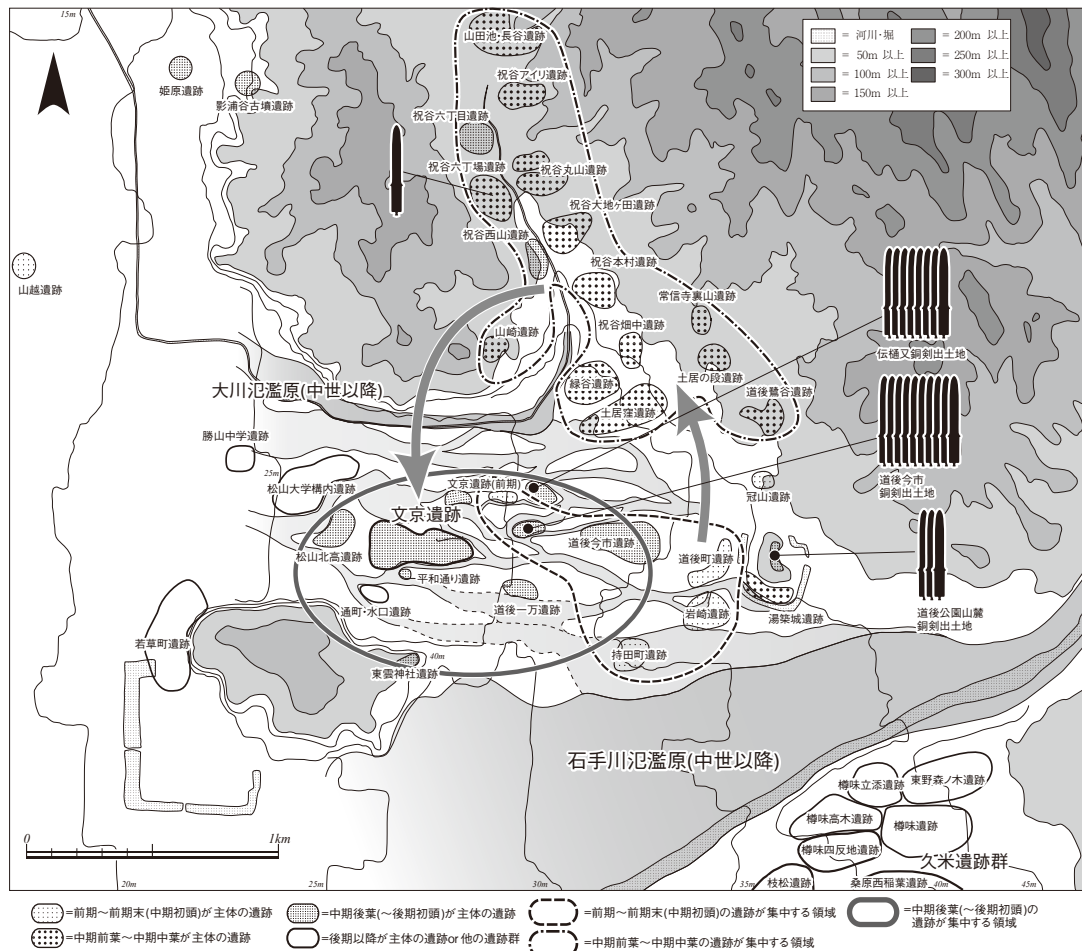


図6 道後城北遺跡群の展開

集中して分布している（図6）。それぞれの遺跡では明確な居住遺構が確認できないが、貯蔵施設や廃棄土坑の検出と各種磨製石器の出土から、各遺跡単位で小規模な経営単位の集落を形成していたと考えられる。小規模な集落が結合するかたちで祝谷地区全体が一つの集合体を形成していた可能性が高い。祝谷畑中遺跡の大溝は、人工的に掘削され、水利に利用されていたと考えられることから、その掘削と維持管理に必要な労働力は、祝谷地区の各集落が協業することで確保することが

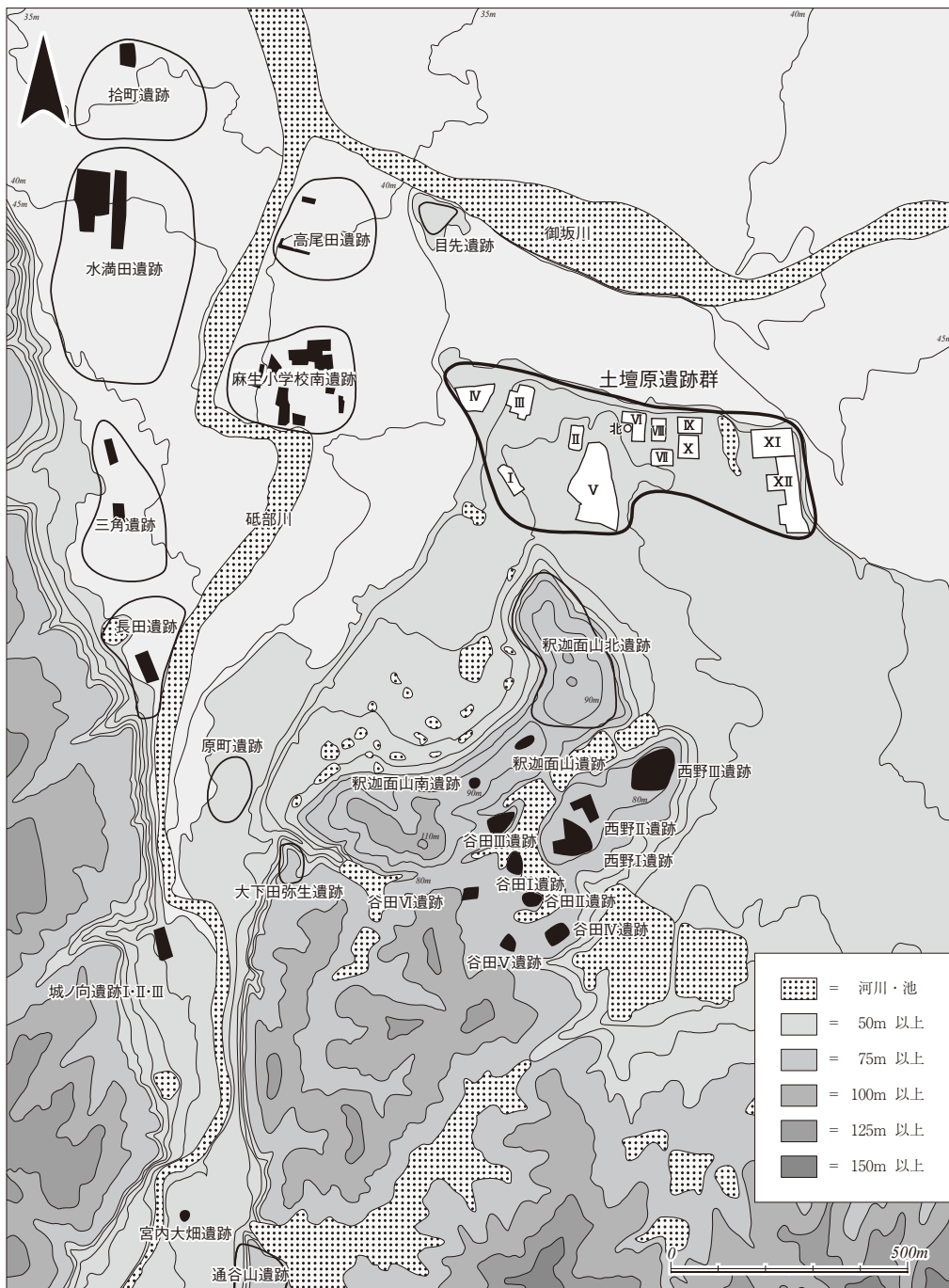


図7 砥部・御坂川遺跡群

できたと推察する。

一方、平野南部の砥部・御坂川遺跡群は、水稻農耕の定着に伴って一気に需要が高まった磨製石器生産を背景に、その石器石材である緑色片岩の搬出地として、この段階から遺跡内の遺構数の増加と言う現象で台頭してくる(図7)。特に水満田遺跡は、この段階における砥部・御坂川遺跡群の核となる集落を形成した可能性が高い。

ステージ⑤: 中期後葉 (図5中段)

そして中期後葉になると遺跡数が爆発的に増加し、明確な居住遺構としての竪穴建物が顕在化する。弥生時代遺跡の増加と言うかたちでの農耕集落の発展現象は、この時ピークを迎える。松山平野最奥部で宝泉遺跡が出現し、川内遺跡群が形成する。この段階では居住域の空間構成もある程度明確になる。和気・堀江遺跡群の大峰ヶ台遺跡頂上部〔柴田2006b〕や砥部・御坂川遺跡群の釈迦面山遺跡〔梅木2002b〕と西野Ⅲ遺跡〔梅木2003〕では、大型竪穴建物1棟と小型竪穴建物1～2棟、それに掘立柱建物などの貯蔵施設が伴う組み合わせが最小構成単位〔柴田2002〕として抽出することができる。同じような単位は、来住遺跡群をはじめとする久米遺跡群内の遺跡でも確認することができる。一方、こうした竪穴建物の顕在化とは裏腹に墓域や墓制については、未だ検出することができず、その様相は全くわからないことも松山平野中期弥生社会の大きな特徴の一つである。

三津・宮前川遺跡群は、前段階からその傾向にあったが、おそらく隣接する和気・堀江遺跡群への基本生活領域の移動に伴って遺跡群が消滅する。その和気・堀江遺跡群も、後述する密集型大規模拠点集落である文京遺跡が所在する道後城北遺跡群の縁辺に接するように遺跡が集中して分布し、遺跡群内で核となる拠点集落は形成しない。

そして久米遺跡群では来住遺跡群の来住廃寺遺跡を中心とした微高地で、砥部・御坂川遺跡群では高尾田遺跡などが立地する河岸段丘上から西野Ⅰ～Ⅲ遺跡が所在する丘陵上の平坦面にかけての範囲で、竪穴建物が比較的集中する居住域を中心に基本生活領域が形成され、遺跡群の核となる拠点集落として発展する。

また伊予遺跡群では標高80～100mの山麓西面に幾筋もの舌状丘陵があり、各丘陵には長尾遺跡などの丘陵性集落が立地する〔柴田2006b〕。この段階の伊予遺跡群には、核となる拠点集落は現在のところ確認できない。規模・構造ともほぼ同質である各丘陵性集落が、農耕に関連する協業活動を行うために有機的につながり、その緩やかな紐帯関係を基盤に一つの農業共同体〔和島1966、和島・田中1966〕を形成していた可能性が高い〔柴田2002〕。

さらに和気・堀江遺跡群では大峰ヶ台遺跡頂上部や潮見山遺跡、久米遺跡群では淡路峠遺跡〔常磐2000〕、伊予遺跡群では行道山遺跡や田ノ浦Ⅰ～Ⅲ遺跡など、高比高の山頂には高地性集落〔柴田2004〕が出現するのも本段階の特徴である。こうした高地性集落は、一過的ではあるがこの段階で活性化する瀬戸内海沿岸弥生社会の経済活動とそれに伴う緩やかな緊張関係を背景に、各遺跡群で形成していた農業共同体が財や情報の互酬的交換を実現するため、交易のランドマークとして構築した非日常的集落であったと推察する〔柴田2006b〕。

このように各遺跡群で居住領域の立地環境に多様な選地原理が認められ、それぞれの遺跡群の領域を最大範囲として、未だ生産域の特定には至らないものの、水田や水路、畑地などの生産域を共有し協業するための農業共同体を形成していた。そしていくつかの遺跡群では、居住域や稀少遺物

が比較的集中する集落が出現し、農業共同体の核となる拠点集落が形成される。

そして各遺跡群が活発に展開するなか、突出した存在として道後城北遺跡群で密集型大規模拠点集落である文京遺跡が出現する。

(5) 密集型大規模拠点集落・文京遺跡の成立とその展開

道後城北遺跡群では上述したように前期から中期前葉にかけて文京遺跡の一部に集落が展開し、墓域が構築された持田町遺跡、環濠を伴う集落である岩崎遺跡や道後町遺跡が遺跡群内の扇状地東側を基本生活領域の中心として展開する。そして中期前葉から中期中葉にかけて規模の大きな開析谷である祝谷に基本生活領域を移動させる。この祝谷では谷部や丘陵、段丘の各所に生活領域を設けて、それぞれが独立した経営単位として小規模な集落が群在するようになり、祝谷全体で一つの集合体を形成している。その中の一つである祝谷畑中遺跡では幅約12m、深さ約3mを測る大溝が構築される。つまり、祝谷に小規模集落の集合体を形成した集団は、祝谷畑中遺跡の大溝を掘削し、それを維持管理する労働力を確保していたことになる。そしてその大溝が埋まった後、その集団は祝谷を離れ、再び扇状地に移動し、旧河道と浅い谷に挟まれた微高地上に密集型大規模拠点集落である文京遺跡を形成するのである(図6)。

文京遺跡は2006年までに29次にわたる調査が行われ、中期後葉～後期初頭の遺構では竪穴建物170棟以上をはじめ、小型掘立柱建物30棟以上、推定床面積90～130㎡の大型掘立柱建物4棟などを検出している。東西が約450m、南北が約200mに及ぶ区画施設を持たない密集型大規模拠点

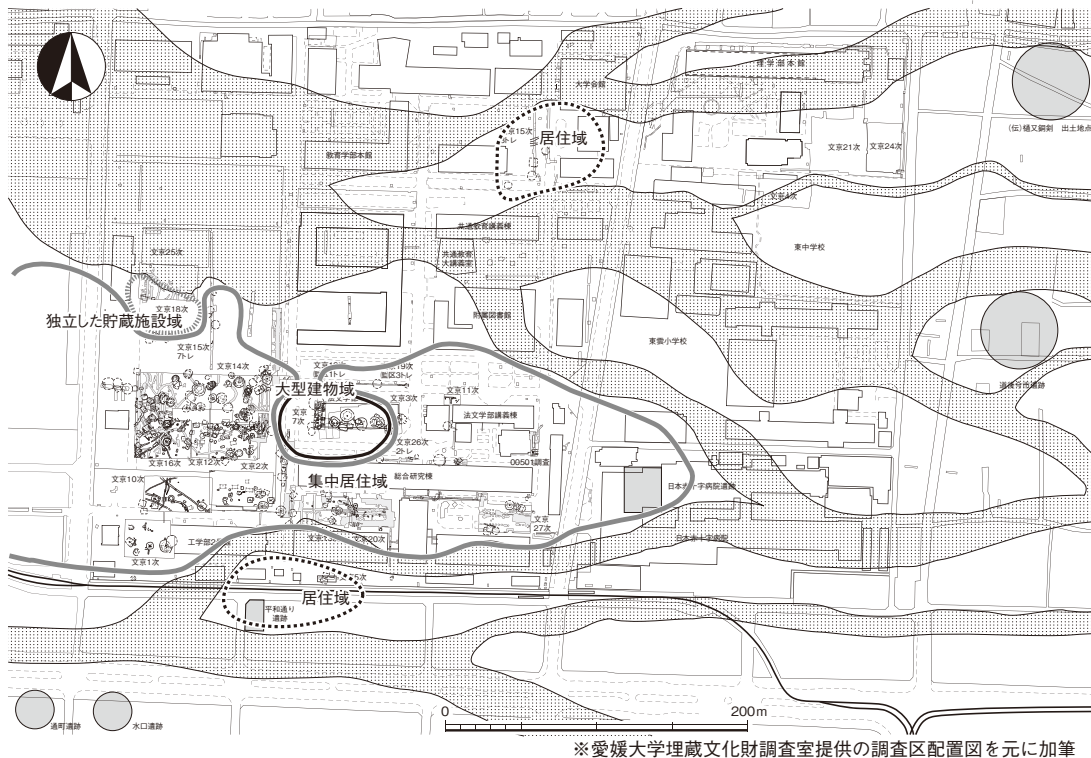


図8 文京遺跡

集落である。

集落の構造は、遺構と遺物類の様相から、大型掘立柱建物や大型竪穴建物（中には南九州にみられる大型の日向型間仕切り住居も含む）、そして祭祀遺構と考えられる周溝遺構が存在し、祭祀遺物が比較的集中する3次調査区と7次調査区を中心とした大型建物域、密集住居群から成る集中居住域、18次調査区を中心とした高床式倉庫群からなる独立した貯蔵施設域、鏡片や鉄素材、ガラス滓、焼成剥離土器片などが比較的集中する金属器・ガラス・土器などの工房区、と言うように機能分節した空間構成を持っている〔田崎1998〕。最近公表された成果では集中居住域には少なくとも3単位が存在し、それぞれにも貯蔵施設を備えた、ある程度完結した集住単位であったことが指摘されている〔田崎2004〕。さらに各集住単位の中に一定の範囲を占有する住居群が存在し、それには竪穴建物の構成を異にする3つの構成単位が存在しているようである。その構成単位には南東九州系土器が集中する箇所や工房区として特定できる住居群が存在していることから、居住構成員の出自やその機能が住居群の単位を構成する要素となっていたと考えられている〔田崎2006〕。また、石器生産は各集住区で個別に行っていたことが従来から指摘されている〔下條1999〕が、最近の研究成果では石器素材を各集住区に分配するための石器素材の調整を行う工房域が13次調査区・20次調査区周辺に想定されている〔田崎2006〕。

以上の内容には報告書が未刊行の調査成果も含まれているため、詳細な実態を検証することは現時点では難しい。現状では次のような集落景観の想定で留めておきたい。文京遺跡では居住域が密集した大規模な拠点集落（密集型大規模拠点集落）を形づくり、大型掘立柱建物や祭祀遺構が検出された大型建物域を中心に、それを取り巻くように170棟以上の竪穴建物で構成される集中居住域と独立した貯蔵施設域が配置され、大型建物域に接する集中居住域の一角に金属器やガラス製品などの工房域が組み込まれた、いわゆる「複合型集落」〔若林2001〕の領域を形成していたものと考えられる。そしてそれを中核的な領域として、旧河道と浅い谷状地形を挟んでその周辺では小規模な居住域が散在しながら衛星状に分布している景観を想定することができよう（図8）。

ではなぜ道後城北遺跡群に展開した集団（農業共同体）は文京遺跡に集住することになったのだろうか。

ここでまず、集団の実態を探るうえで、重要な鍵となる松山平野における弥生土器の地域性を見ておきたい。松山平野には技術系譜の異なる弥生土器が共存している〔梅木1995・田崎2004〕。それが特に顕著に認められるのが中期後葉の段階である。技術系譜の異同を顕著に現す甕形土器をとりあげると、在地系土器はヨコナデ技法が発達しない上げ底の甕形土器が主体となるもので、明瞭な変遷が中期前半から中葉、そして後葉にかけて認められる〔梅木2000〕。これを非凹線文系土器と呼ぶ。そして中期後葉で出現するのが回転台と発達したヨコナデ技法を使用する平底の甕形土器に代表される凹線文系土器である。それぞれの土器には細部にわたる形式変化が認められるものの概ねこの両者に分けることができる。田崎が指摘するように集落内あるいは周辺集落を含む協業体制での土器生産〔田崎2004・2006〕であれば、それぞれの土器生産に携わる集団は異なる技術系譜を持つ集団と言える。そして各遺跡群の各遺跡と各遺構では、出土する弥生土器の組成比が、どちらかに偏ったり、あるいは均等であったりとはばつきが認められるのである。こうした現象は各遺跡に居住する集団自体が異なる技術系譜を持つ集団そのものであった可能性と、その集落が持つ土器

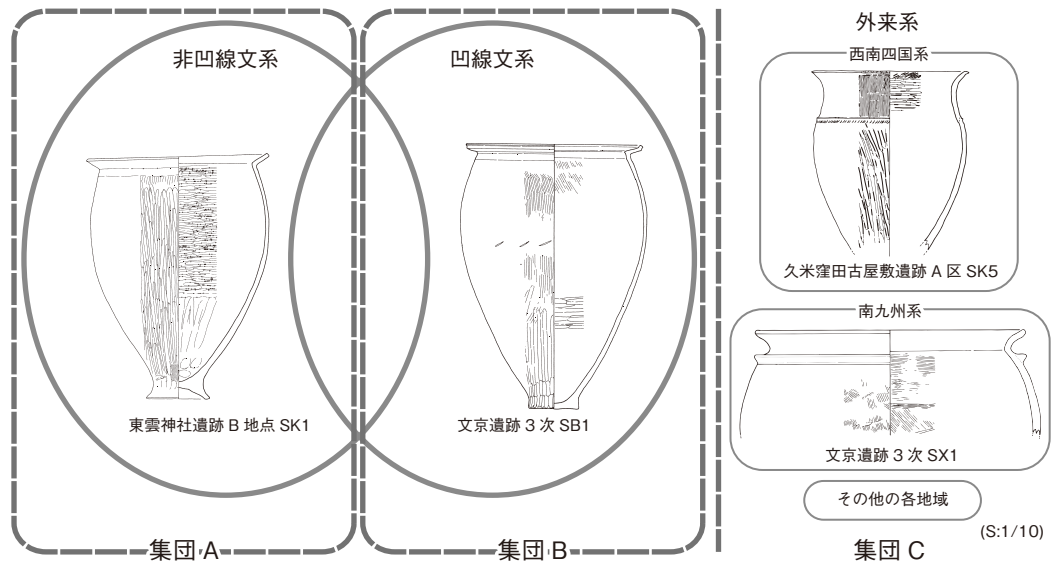


図9 中期後半弥生土器の位相と集団

生産地あるいはその供給ルートの違いであった可能性が指摘できる。いずれにしても出土土器の組成比は、集団の性格と集団間の紐帯関係を如実に反映しているものと見て間違いはない。

つまり、松山平野の中期、特に中期後葉から後期初頭の集団関係は、大きく分けて次のような3つの集団に大別することができる(図9)。集団Aは、非凹線文系土器を製作する伝統的な製作技術基盤に支えられた在地集団である。集団Bは、発達したヨコナデ技法を用いる新来の技術を会得し、凹線文系土器を製作する集団である。この集団Aと集団Bは、互いの製作技術との接触・融和が断続的に行われていた可能性が考えられる。集団Cは外来系土器の搬入品を使用もしくはそれを製作する集団で、松山平野では四国西南部の土器である西南四国型土器〔柴田2000b〕をはじめ、南九州・東九州・周防・安芸・吉備・讃岐など各地域の土器群が、僅かであるが確認されている。この集団Cが成立する契機については不明と言わざるを得ないが、外来からの移動・移住によって生成した集団であることは想像に難くない。この3つの集団を念頭に置きつつ、文京遺跡の集落構造を見ていくことにしよう。

文京遺跡の集落構造については、既に下條や吉田が詳しく指摘しているのので、それに拠りながら確認していきたい。まず、下條は文京遺跡が「農耕生産を基盤に置く農業集落」であることを認め、たうえて「多数の労働力を一処に集約した集住型の集落」であり、「集落計画と階層化」を果たした密集型大規模拠点集落であると指摘している〔下條1999〕。既往の調査では水田などの機能空間の特定には至っていないものの、集中居住域で検出される石庖丁などの遺物は、居住構成員が水田農耕に従事していたことを物語っており、下條の指摘を裏付けている。さらに大型建物域や貯蔵施設域、そして工房域の存在は、集落の配置が計画的であったことを示唆している。しかも工房域の生産には一般集落では作り得ない青銅器や鉄器が含まれていた可能性が高いことを吉田が指摘している〔吉田2002・2008a・b〕。このような計画性の高い集落が、前段階までは祝谷地区で小規模な集落の集合体であったにもかかわらず、突然、中期後葉に計画的に配置された大型拠点集落として出現する様態は、何らかの原因による意図的な集住であったことを考えずにはいられない。その意図

的な集住を牽引したのは、大型建物域で祭祀を執行した集団であり、首長層であったと考えられる。吉田が指摘しているように平形銅剣の生産が、密集型大規模拠点集落としての文京遺跡の集落動態と重なり、その平形銅剣の生産も行っている可能性が高いことには注目しなければならない。事実、平形銅剣が文京遺跡を中核として周辺に配された小規模集落に、あたかも農業共同体の領域を顕示するがごとく22口が埋納されていることも示唆的である。おそらく首長層は平形銅剣の生産・祭祀までも管理・運営する状況にあったのであろう。下條が指摘する「外交活動とその成果」に関しては、10次調査で出土した小型前漢鏡片をはじめ、鑄造鉄器や石製指輪などの舶載遺物が、北部九州を通じた大陸や半島にまで及ぶ交流実態とその成果として如実に現している。さらに吉田は、平形銅剣によって瀬戸内海南岸を中心に中部瀬戸内弥生社会との交流・交渉を実現させた指摘している〔吉田2002〕。また周辺地域との関係については、サヌカイトや赤色珪質岩などの石材流通と周防・安芸・吉備・西南四国、そして東九州・南九州の土器の搬入・搬出の実態に盛んな交流活動が現れている。大型建物域で検出された日向型間仕切り住居は、首長層を介した南九州地域の集団そのものとの移動・交流の結果と見ることができそうである。

以上、下條・田崎・吉田の各研究成果に導かれながら、文京遺跡の集落構造をみてきた。次にその集団構成を探ってみたい。その際、上述した3つに大別できる集団A～Cが平野内に存在することに重要な視点を置きたい。文京遺跡の集中居住域では、非凹線文系土器に表徴される集団A、凹線文系土器に表徴される集団B、そして外来系土器を使用する移動・移住集団である集団Cが共存している。そして大型建物域で出土する土器の様相が首長の出自に反映すると考えることが許されるならば、首長層の生成には集団Aだけではなく、集団Bが深く関与していた可能性が高い。つまり密集型大規模拠点集落は、伝統的な在地集団のみで生成したのではなく、凹線文系土器製作を技術基盤にもつ集団が移入・定着・共存することで生成したのである。そして大型建物域に居住した首長層は、北部九州を主とした西方社会との交渉を実現させ、威信財や生産財を獲得し、集落

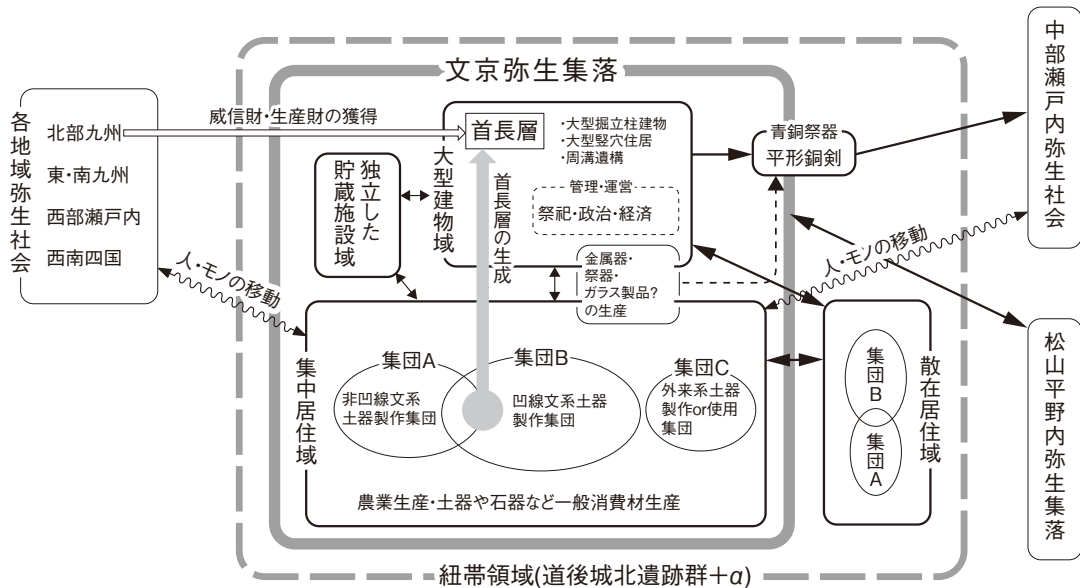


図10 文京遺跡の構造模式図

内部で青銅祭器を含む金属器生産やガラス製品生産などを行い、そして平形銅剣を中心とした共同体祭祀を共有することで東方の瀬戸内社会や平野内各集落との交流・交渉を実現させたと考えられる。その内海を媒介にした活発な経済活動は、集団Cの移動・移住を促進し、文京遺跡内での定住、工房・工人への関与を実現させたのではないだろうか。

つまり意図的集住の契機とは中期後葉の活性化した瀬戸内海沿岸弥生社会の経済活動にあり、道後城北遺跡群はそれに触発され、そしてそれに対応するために上述したような機能を有する密集型大規模拠点集落を形成させた可能性が考えられる。

この密集型大規模拠点集落である文京遺跡が核となって形成された農業共同体は、道後城北遺跡群の領域はもちろんのこと、近接する和気・堀江遺跡群も取り込むかたち（道後城北遺跡群 + a）で規模を拡大させていた可能性が高い（図10）。

そしてステージ⑤とした中期後葉の松山平野では、密集型大規模拠点集落である文京遺跡を核とした道後城北遺跡群を中心に中小規模の拠点集落を擁した遺跡群、拠点集落を擁しない遺跡群で構成された弥生社会を復元することができる。これは若林が提唱する集落分布モデルであるA1類型〔若林2003〕に相当する。

(6) 後期弥生集落の展開

ステージ⑥：後期前半（図11上段）

後期に入ると密集型大規模拠点集落である文京遺跡は、突如として解体し、集落は道後城北遺跡群内の各所に小規模な集落単位で拡散してしまう。あたかも中期後葉以前（ステージ④）の集落景観に戻った感じさえする。

こうした現象は他の遺跡群でも拠点集落の消滅や規模の縮小など同様の傾向が認められる。

和気・堀江遺跡群は、前段階からその傾向にあったが、おそらく隣接する道後城北遺跡群の基本生活領域の拡散に伴って一体化した可能性が高く、遺跡群と言う地形的完結性を超えた連動性が看取できる。

一方、久米遺跡群では、拠点集落を形成していた来住遺跡群で、遺構量の減少など、明らかに衰退傾向が認められる。それに対して樽味-天山遺跡群は、決して遺構量や遺物量が多いとはいえないが、領域内で複数の遺跡が展開する。来住遺跡群を中心に展開していた中期弥生集落は、後期に入り、樽味-天山遺跡群へと移動し、そこで前段階から居住していた集団と結合することで新たな集落経営が始まったのではないだろうか。樽味立添遺跡1次調査で出土した貨泉（図12）がこの段階に伴うものと仮定すると、樽味-天山遺跡群が拠点集落としての機能を保持していた可能性も指摘できる。

石井・浮穴遺跡群や川内遺跡群では、明らかに遺構量と遺物量の減少が認められ、集落の衰退、もしくは規模の縮小が看取できる。

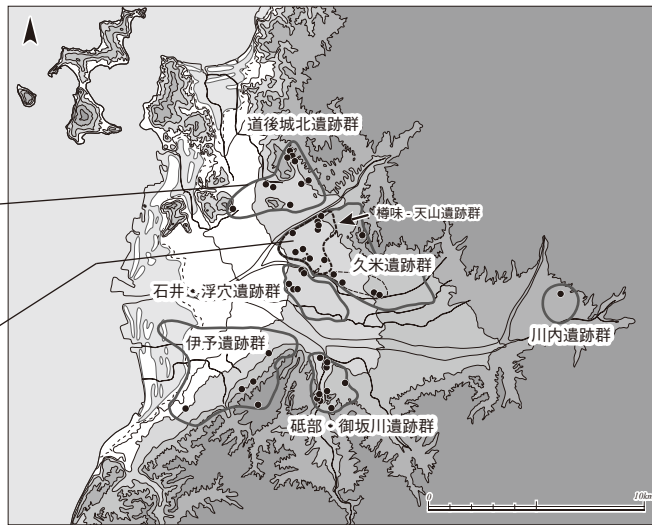
砥部・御坂川遺跡群は、河岸段丘と丘陵性集落を中心に継続して遺跡が展開するが、遺構量と遺物量の減少は他の遺跡群と同様で、総体的に見れば集落の衰退傾向にあるといえる。

伊予遺跡群は、前段階から継続して丘陵性集落を中心に展開している。前段階に松山平野の各所で出現した高地性集落のほとんどは、この段階で消滅しているものの、伊予遺跡群の行道山遺跡は

ステージ⑥ 後期前半

文京遺跡の解体と
道後城北遺跡群の拡大

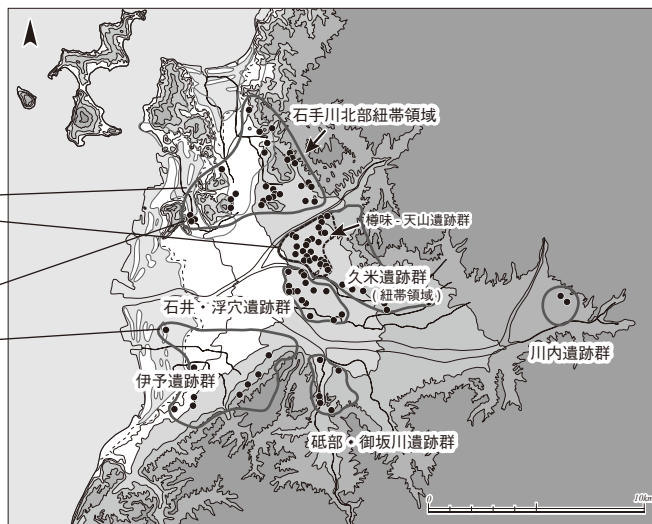
久米遺跡群内梅味・天山遺跡群の台頭



ステージ⑦ 後期後半

紐帯領域の形成

海浜部への進出



ステージ⑧ 古墳初頭～前期前葉

朝日谷2号墳

宮前川北斎院遺跡

若草町遺跡

北井門遺跡

下三谷片山・太郎丸遺跡

土壇原遺跡

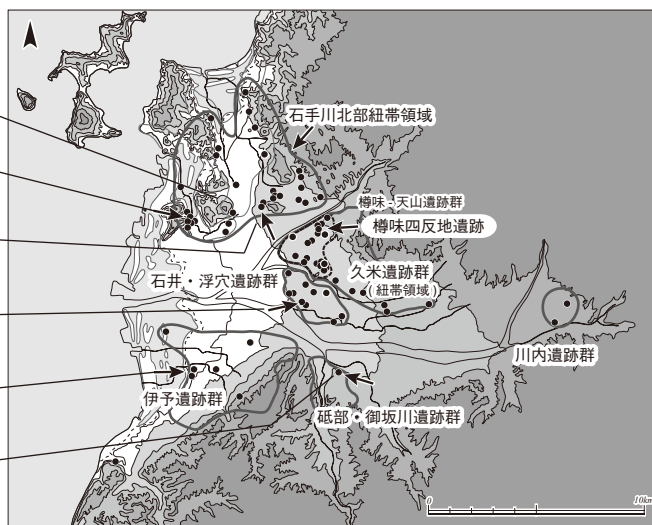


図11 弥生時代遺跡の変遷3

存続している。こうした高地性集落の存続は、緩やかな紐帯関係を基盤に各丘陵性集落が一つの農業共同体を形成していた伊予遺跡群が、その機能をこの段階まで衰退することなく維持していたことに起因しているのではないだろうか。

では、もう一度、道後城北遺跡群に話を戻そう。

文京遺跡のように中期後葉の大規模拠点集落が解体する要因とは、いったい何であったのだろうか。列島各地の拠点集落にみられる同様の解体現象については灌漑技術や水田開発に伴う集落の分散化〔秋山 2005a・b〕や首長層の集落からの分離〔都出 1989〕などの要因が考えられている。しかし松山平野では灌漑技術の革新や新たな水田開発に繋がるような生産遺跡の検出は現時点では確認できていない。また文京遺跡では首長層の存在は想定できるものの、特定個人あるいは特定家族を示すような首長層の抽出は、墓制が確認できない地域性もあって中期から後期前葉の地域社会のなかでは見いだすことはできない。では一体何が要因と考えられるのか。文京遺跡での密集型大規模拠点集落が解体する後期前葉には凹線文系土器を製作する技術系譜が衰退していること、そして伝統的な在地土器製作技術の系譜上にある非凹線文系土器が、退化傾向にあるものの後期前半に展開した土器様式の主体を占めていることに注目したい。つまり中期後葉の集住の契機や集落の増加・拡大、そして一部の首長層の生成に深く関わった凹線文系土器群を使用する集団（集団 B）が、分離あるいは衰退・消滅などの要因で集落経営への関与が弱まるとともに集落自体の解体・縮小が始まるのである。こうした首長階層の継続性をも否定するような集団の再編成が、集落の解体と分散の実質面であったと考えることが現時点で最も有効ではないだろうか。それと呼応するように前期末以降、世帯共同体レベルで執り行われていた分銅形土製品を用いた祭祀は、後期に入ると集落の解体とともに衰退する〔梅木 2006〕。また平形銅剣を中心とした共同体祭祀もその埋納行為を後期前葉に行ったあと、途絶えてしまう〔吉田 2008〕。このように中期瀬戸内弥生社会の精神社会を支えてきた祭祀行為の崩壊もこの段階に起こっており、様々な事象の急激な変動は地域内で起こったローカルな現象のみでは解決できない複雑性を持っていることも事実である。集団の再編成の直接的契機について、本稿では明確な回答を用意することができないが、列島規模の社会変動も視野に入れる必要性を強調して、今後の課題としたい。

ステージ⑦：後期後半（図 11 中段）

道後城北遺跡群では、集落が散在的に分布し、舶載鏡片（破鏡）が出土した文京遺跡付近からその西側で完形の前漢鏡が出土した若草町遺跡付近にかけての範囲を中心に周辺の遺跡群（和気・堀江遺跡群、三津・宮前川遺跡群）を取り込んで、大規模とまでは言えないが遺跡群のまとまりを形成している。和気・堀江遺跡群や三津・宮前川遺跡群では、再び遺跡の出現が顕著に認められるようになるが、もはや遺跡群としての領域内でのまとまりは薄弱となり、道後城北遺跡群から進出した新たなまとまりの中へ組み込まれていく。このまとまりを後述する「紐帯領域」を使用して石手川北部紐帯領域と呼称する。

一方、久米遺跡群内の樽味・天山遺跡群は、図 12 で示したように石手川と小野川・川附川に挟まれた範囲が中心で、北側は東野森ノ木遺跡や樽味遺跡・樽味四反地遺跡からはじまり、枝松遺跡・東本遺跡・釜ノ口遺跡を経て、独立丘陵の天山に所在する天山北遺跡にまで及ぶ遺跡群である。その規模は長さが北東方向で約 2.5km、幅は最大で 1.3km を測る。各遺跡は連結した集合体のような

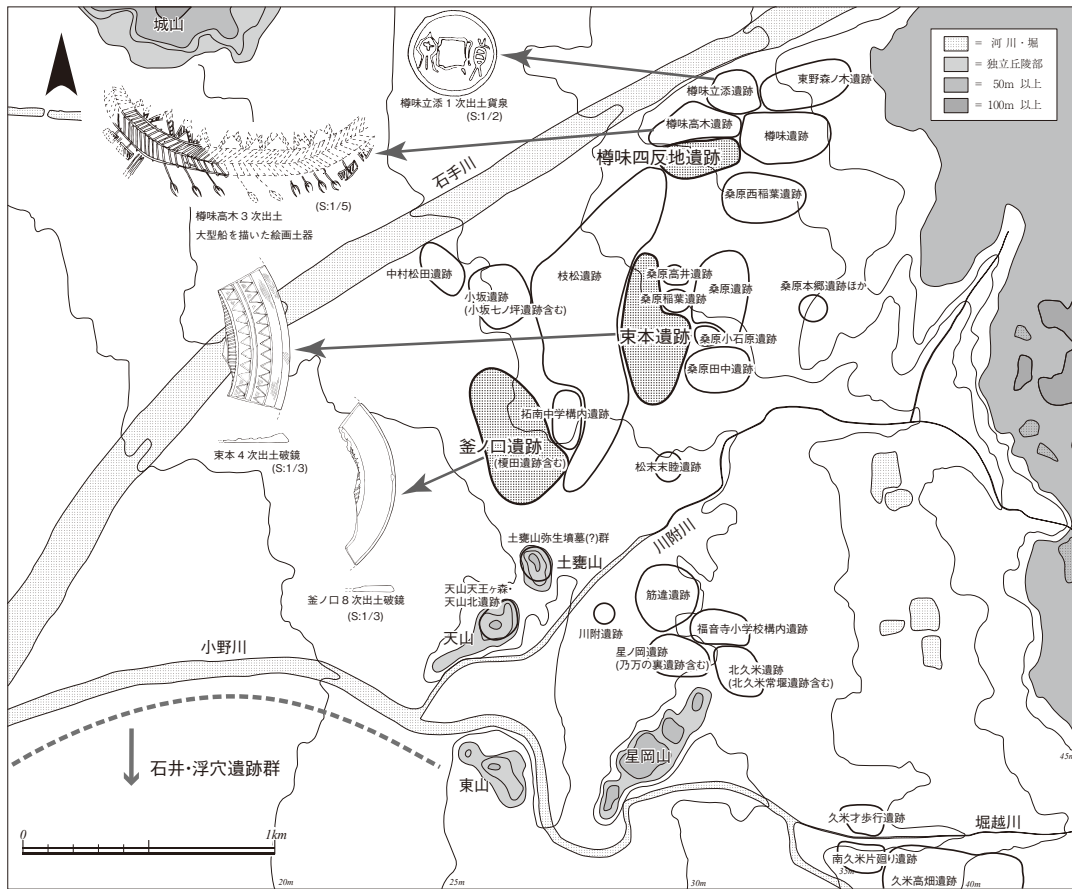


図12 久米遺跡群内樽味-天山遺跡群の展開

平面形状を呈するが、実際は網の目状に流れる旧自然流路と溝によって分断されていたようであり、それらは樽味四反地遺跡や桑原西稲葉遺跡、桑原小石原遺跡、桑原遺跡、東本遺跡など各遺跡の調査で遺構として確認されている。つまり、樽味-天山遺跡群では、微高地に径150～200mの規模で基本生活領域を形成した集落がつくられ、同様の集落が自然流路と溝を挟んで隣接しながら複数で存在する集落景観を想定することができる。この遺跡群では大規模調査が行われていない現状での総数にも関わらず、検出されている竪穴建物は85棟を超えており、実際はかなりの棟数が存在していた可能性が高い。微高地に存在する集落は、調査成果をふまえると3～5棟の竪穴建物が一単位となって5単位前後が集まる中規模の集落構造であったと考えられる。そして検出される竪穴建物の構造は、各集落単位で様相を異にしている。同一の居住領域と思われる東本遺跡とそれに隣接する遺跡では、竪穴建物の内部に2基が並列する独特な中央土坑がつけられている(図13)。それは「10(イチマル)」形の平面形状を呈した中央土坑で、播磨を中心とした東部瀬戸内地域で中期から後期にかけて分布する独特の竪穴建物内部構造物に類似している[多賀1996]。こうした構造物は、遺跡群内に展開した釜ノ口遺跡など他の集落では確認されていない。東本遺跡から検出される竪穴建物が東部瀬戸内に直接関連していたか否かは、今後他の遺物も含めて慎重に検討しなければならないが、少なくとも構造の異なる竪穴建物が集落単位で存在していたことは指摘できる。また、東本遺跡と釜ノ口遺跡に所在した集落は、それぞれに舶載鏡片(破鏡)や多量のガラス小玉

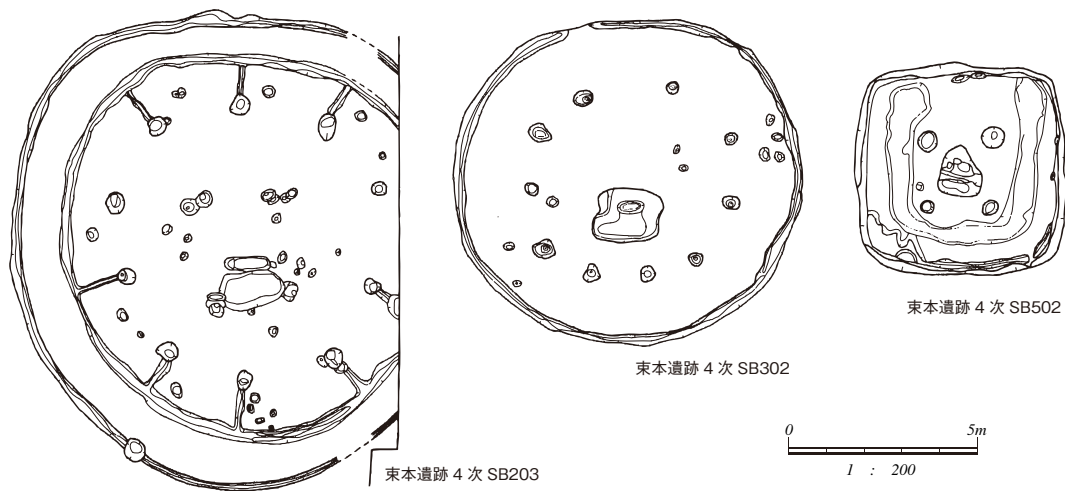


図13 「10 (イチマル)」中央土坑を有する竪穴建物

が出土する竪穴建物を有していることから、それらを保有することができる共同体を形成していたことになる。つまり、それぞれの集落には有力家族で構成される村落首長〔寺沢 2000〕に相当する階層の首長が存在したと考えられる。こうした首長を擁する複数の中規模集落が緩やかに連結したのが樽味-天山遺跡群といえる。そしてこの遺跡群では、樽味高木遺跡 3 次調査で出土した大型船を描いた絵画土器など、活発な対外交渉を示唆するような稀少遺物が比較的多く出土することから、松山平野の新たな中核的な拠点集落として台頭する兆しをこの段階から見せはじめています。松山平野では平形銅剣祭祀に替わって、図 14 に掲載したような独自に発展した大型器台〔松村 2008a・b〕が、松山平野弥生社会の心的共同性を高める共同体祭祀の新たな装置となる。この大型器台が樽味-天山遺跡群で比較的多く出土していることも、平野内での優位性を物語っている。

他の遺跡群ではこの段階で遺跡数・遺構数・遺物量が増加し、活性化した集落展開が認められるようになる。石井・浮穴遺跡群では東石井遺跡と西石井遺跡で、砥部・御坂川遺跡群では水満田遺跡、そして川内遺跡群では宝泉遺跡で拠点集落としての機能を維持している。伊予遺跡群では前段階から継続する丘陵性集落群が展開し、丘陵性集落の一つである向山遺跡では広形銅矛を保有するまでに至っている。

この段階の特徴として、再び海浜部に遺跡が進出していることにも注目しなければならない。石手川北部紐帯領域の宮前川北斎院遺跡と伊予遺跡群の浜堤列に立地する西古泉遺跡が旧汀線に面した遺跡である。各遺跡群で生成した地域共同体の外来物資・非自給物資獲得への希求が、新たに海への指向性へとつながり、集落立地に反映されたのではないだろうか。

ステージ⑧：古墳時代初頭（後期Ⅲ）～前期前葉（図 11 下段）

まず、この段階の最大の特徴として墓制の顕在化をあげることができる。図 14 は、砥部・御坂川遺跡群に所在する土壇原北遺跡と土壇原Ⅵ遺跡の平面模式図である。土壇原北遺跡は先述した大型器台を中心とした精製された祭祀土器が出土した遺跡〔長井 1977〕で、56 基の木棺を内部主体に持つ土坑墓群が検出された土壇原Ⅵ遺跡と近接しており、葬送儀礼に伴う祭祀行為を行っている。土壇原Ⅵ遺跡内でも数基の土器だまりが検出されており、大型器台を中心とした葬送儀礼が繰り返

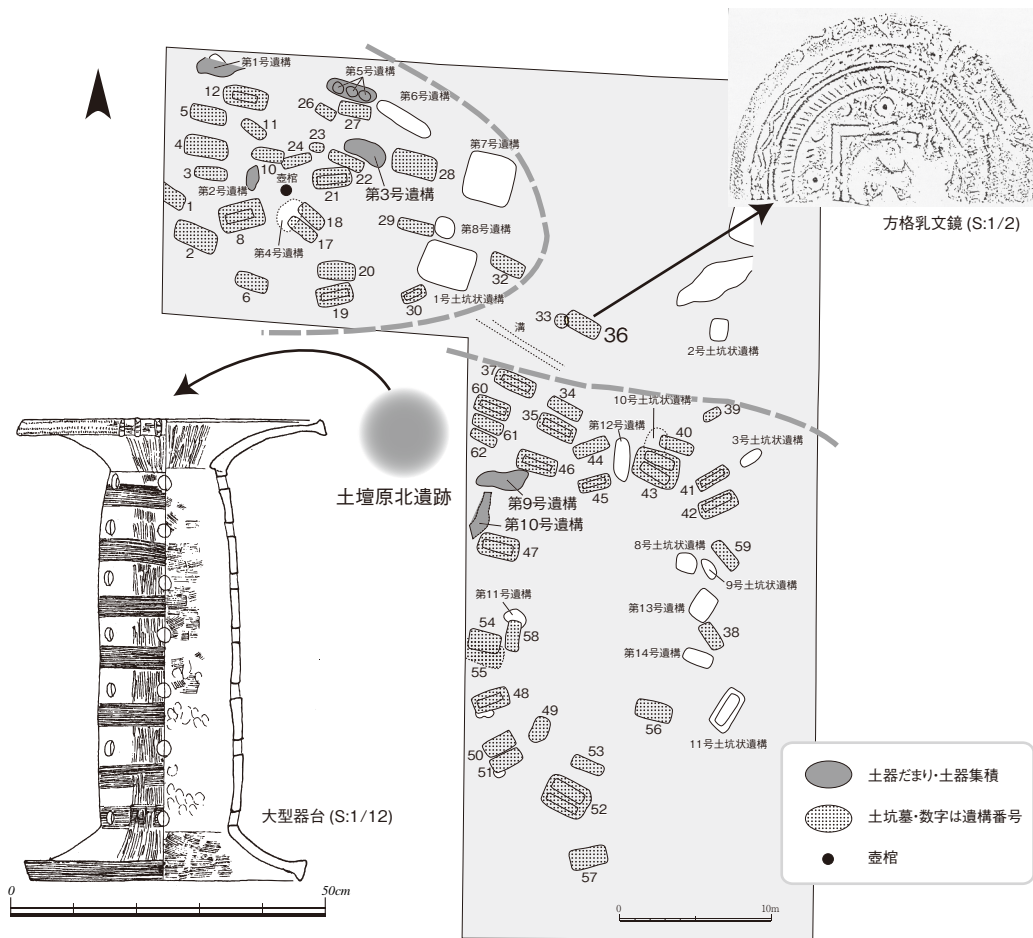


図14 土壇原北・土壇原VI遺跡の墓域と大型器台

し行われていたようである。ここで注目できるのは密接して群在する土坑墓群の中で独立して存在し、唯一、副葬品を伴っている36号土坑墓である⁽²⁾。この土坑墓には鉄製刀子・管玉とともに舶載鏡である方格乳文鏡の破鏡が副葬されていた〔名本2007〕。このことから、砥部・御坂川遺跡群が、土坑墓群の領域内に留まっていたものは、特定個人として画された場所に首長墓を構築することができる首長階層を生成していたことに注目することができる。

そして、共同体内の階層分化がようやく墓域の中でも顕在化したこの段階に、久米遺跡群内樽味・天山遺跡群の一角にある樽味四反地遺跡で、床面積160㎡前後の大型総柱建物2棟(建物A・B)が並列して建ち並ぶ首長居館が、一部を直線的な溝で区画し、同一時期の遺構をほとんど伴わない居住域から独立した広い空間に造営される(図15)。さらに3号大型建物の存在や、建物Bの前面と後面に認められる8次調査SP362やSB204、9次調査SX102などの祭祀関連と思われる遺構の存在は、首長居館の継続性と祭祀行為の付随を証明しており、一過性の大型建物域ではないことを現している。このように松山平野における久米遺跡群内樽味・天山遺跡群の成熟した地域共同体としての突出性は、共同体内の階級分化の表徴として共同体成員からの空間的独立性や隔絶性を成しえた首長居館〔寺沢1998〕の出現と言うかたちで具現するのである⁽³⁾。

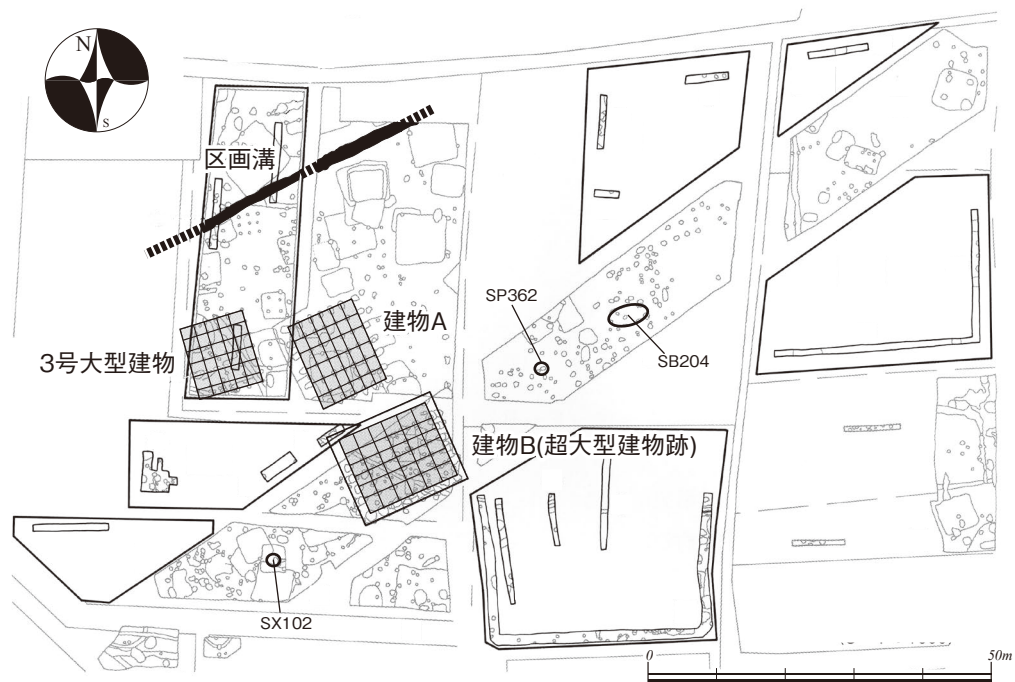


図15 樽味四反地遺跡と首長居館

その一方で道後城北遺跡群若草町遺跡や石井・浮穴遺跡群北井門遺跡などでは、集落と首長墓の関連が居住域に隣接して首長墓を中心とした墓域が付帯するかたちで顕在化してくる。ただ墓域が居住域から分離していないことなど、先述した砥部・御坂川遺跡群土壇原Ⅵ遺跡の集団墓から抜け出すことのできない首長墓である36号土坑墓と同じく、特定家族もしくは特定個人として隔絶した存在になり得なかった首長階層の存在を、その集落構成と墓制から読み取ることができ[柴田2006c]、首長居館を擁する久米遺跡群内樽味・天山遺跡群で生成した首長との階層格差が著しいことを指摘することができる。

さらに道後城北遺跡群では、海岸部に面した宮前川北斎院遺跡を中心にその周辺の各遺跡で、外来系土器を多く含む港湾性集落とも呼べるような特化した機能を有する集落が出現している。これは前段階にみられた地域共同体の外来物資・非自給物資獲得への希求が、港湾性集落として具現化したものとして評価できる。こうした遺跡近辺の丘陵部には、出現期の方後円墳である朝日谷2号墳が構築されることも示唆的である。港湾性集落の出現は、外来系土器の出土は少ないものの下三谷片山・太郎丸遺跡や西古泉遺跡を擁する伊予遺跡群でも指摘できそうである。

以上、この段階では前段階から継続する遺跡群のまともりは維持され、各遺跡群は遺構量・遺物量の増加と言うかたちで発展する。その結果、首長墓の顕在化や集落構成の多様化、そして首長居館の出現など、新たな展開と大きな画期が認められるのである。

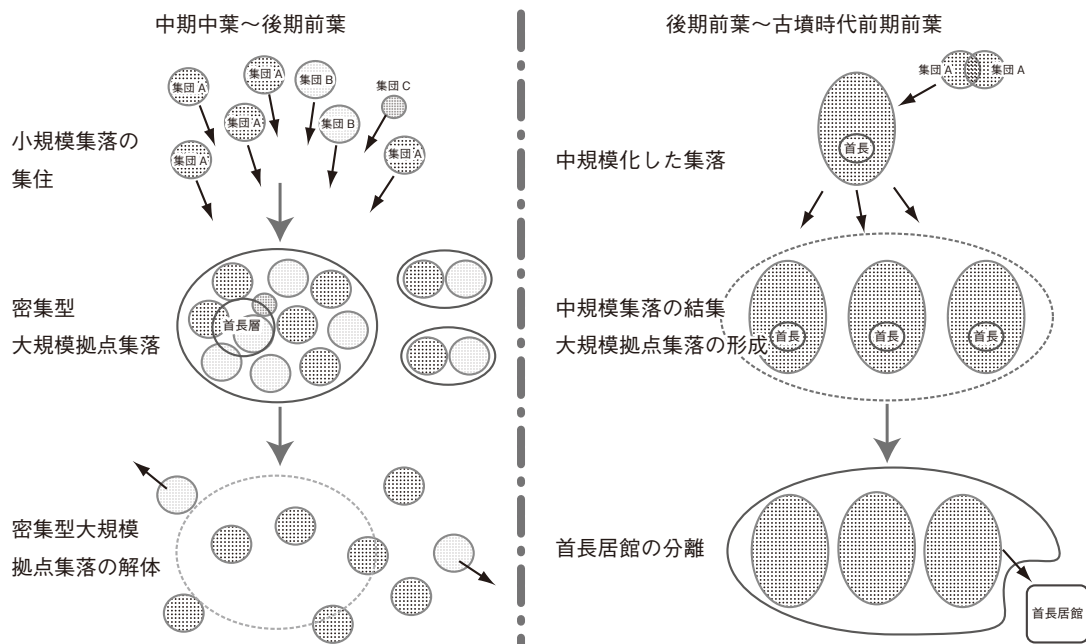


図16 大規模拠点集落の集団イメージ

③……………紐帯領域の形成と古墳時代への胎動

文京遺跡の解体後、松山平野では後期弥生集落の基本生活領域が再編成され、新たな大規模拠点集落、久米遺跡群内の樽味-天山遺跡群が突出した存在となっていくことを確認した。

ここで、前節で述べてきた大規模拠点集落の動態をまとめてみよう(図16)。中期後葉から後期前葉にかけては、まず、小規模な経営単位の集落が一つの集団として、複数の集団が特定の領域に集住し、密集型大規模拠点集落を形成する。この場合、集住した各集団には、土器製作などにおいて出自の異なる集団が混在する。集落内では集住した集団の中から首長層が生成され、大型建物域や工房域などの機能分節した集落構造をつくりあげる。そして後期前葉ころ、首長層を形成していた集団が分離あるいは衰退・消滅することで、密集型大規模集落は解体し、集団の分散化がおこる。

後期前葉から古墳時代前期前葉では、まず、分散化した集団の中で同一出自の集団が結合することで径150～200mの範囲を基本生活領域とする中規模化した集落を形成する。そして、それぞれに首長を擁する中規模集落は、同一の領域に結集し、自然流路などを挟んで隣接しながら複数で存在する集落景観をつくりあげ、その範囲が大規模拠点集落として機能するようになる。さらに古墳時代初頭に入ること、中規模集落の結合体である大規模拠点集落内では首長層の階級分化が進行し、集落から独立した首長居館を形成するのである。この中規模集落の結合体である大規模拠点集落が久米遺跡群内の樽味-天山遺跡群であり、独立した首長居館が樽味四反地遺跡である。

ステージ⑤とした中期後葉の松山平野では、密集型大規模拠点集落である文京遺跡を核とした道後城北遺跡群を中心に、階層序列は未分化のまま、中小規模の拠点集落を擁した遺跡群、拠点集落

を擁しない遺跡群で構成された弥生社会を復元することができた。そしてステージ⑦の後期後半以降では、樽味-天山遺跡群を擁した久米遺跡群が、階層序列化が進行しつつある松山平野後期弥生社会で突出した存在となった。いずれも大規模拠点集落を擁した地域社会であることには違いがないが、前者と後者では階層社会の成熟度や集落の内部構造において、全く質の異なる存在であったことが指摘できる。

前節で明らかにしたように平野内には久米遺跡群以外にも道後城北遺跡群のように周辺の遺跡群の一部を取り込んで拠点集落としての新たな遺跡群のまとまりが形成される。こうした地形的完結性を超えて有機的なつながりを持つ遺跡群のまとまりを「紐帯領域」と呼称する[柴田2008a]。「遺跡群」が水田や水路、畑地などの生産域を共有し協業するための地形的完結性に制限された集落（農業共同体）の単位だとすると、「紐帯領域」は青銅器の保有や祭祀行為を共有する心的共同性を背景に、外来物資や非自給物資などの外部依存物資の入手と分配を行うため、そして生業活動や居住域の拡大や移動を実現するために結合した地域共同体の単位として理解することができる。

後期後半以降の道後城北遺跡群は、周辺の遺跡群である和気・堀江遺跡群と三津・宮前川遺跡群を取り込んで石手川北部紐帯領域として展開する。石手川南部に展開した久米遺跡群は、そのものが樽味-天山遺跡群と来住遺跡群を取り込んだ紐帯領域として存在した。石井・浮穴遺跡群、砥部・御坂川遺跡群、伊予遺跡群、川内遺跡群は遺跡群の領域を維持しつつ、地域共同体の単位として発展する。このように後期後半から古墳時代前期にかけて出現・継続したいくつかの紐帯領域と遺跡群は、古墳時代社会へと移ろう松山平野における首長階層を頂点とした地域社会の基盤となる領域であり、古墳時代前期の首長墓形成に関わる地域集団の単位でもあったと考えられる。その中でも独立した首長居館（樽味四反地遺跡）を有する久米遺跡群と言う紐帯領域は、成熟した階層分化を遂げた地域共同体であり、古墳時代前半期の松山平野古墳時代社会を牽引した突出した地域集団であったことは間違いない。

おわりに

以上、松山平野の弥生集落の動態を通して、稲作農耕の受容から定着、そしてその発展過程を検討してきた。その結果、中期後葉の密集型大規模拠点集落である文京遺跡の成立から解体に至る過程を経て、解体・再編成された後期弥生社会の地域集団は、久米遺跡群に代表されるいくつかの地域共同体を生成し、古墳時代社会へと移ろう松山平野における特定首長を頂点とした地域社会の基盤を形づくり、古墳時代前半期の首長墓形成に関わる地域集団の単位を形成したのである。こうして松山平野の弥生社会のなかで出現し、集落の変動過程を経て特定首長を擁した地域社会は、古墳時代の幕開けを迎えることとなる。

謝辞 本稿を作成するにあたり、共同研究『縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』において、主宰である藤尾慎一郎氏をはじめ、共同研究のメンバーである石黒立人、扇崎由、小澤佳憲、小林謙一、小林青樹、設楽博己、西本豊弘、馬場伸一郎、濱田竜彦、広瀬和雄、安英樹、若林邦彦の諸氏には刺激的な議論と貴重なご助言を賜った。また、下條信行、田崎博之、吉田広、梅木謙一、森下英治、

近藤玲，久家隆芳，山之内志郎，橋本雄一，柴田圭子，松村さを里の諸氏にはご教示を賜り，資料の作成に便宜を図っていただいた。そして岡美奈子，松本美香の両氏には資料の集成，図版作成に協力を得た。記して感謝の意を表したい。

註

- (1)——拙稿〔柴田2008b〕で提示した松山平野の弥生土器後期編年との対応関係について，その後の検討の結果，梅木編年後期Ⅱ-1の位置づけに若干の訂正が必要となった。以前，梅木編年後期Ⅱ-1を後期前半としていたが，実際は後期Ⅱ-1の前半部分が後期前半に含まれ，後期Ⅱ-1の後半が後期後半に位置づけられるものとして考えるに至った。本稿ではそれを是正し，本文中と表2に対応関係を明記しているので参照されたい。また松山平野での中期後葉の土器群と後期初頭の土器群の明確な分別は難しく，遺跡の消長に関して苦慮する結果となった。今後の課題である。段階設定では拙稿〔柴田2000a〕の様式区分に従い，表中に示した編年試案のとおり，前期末～中期前葉を一つのステージとして設定した。
- (2)——報告書未刊の土壇原Ⅵ遺跡36号土坑墓は，松山市史料集で38号土坑墓として紹介されていた〔長井1986〕が，今回，遺物と測量図面を照合した結果，36号土坑墓が正しいことが判明し，その名称で統一した。
- (3)——樽味-天山遺跡群では逆に首長墓の存在が明らかになっていない。天王天ヶ森遺跡・天山北遺跡や土甕山弥生墳墓(?)群など，遺跡群南部に存在する独立丘陵上に立地する遺跡がその候補として考えられるが，実態はよくわかっていない。首長墓など，墓制の検出が今後の課題である。

参考文献

- 秋山浩三 2005a 「弥生大形集落断想(上)」『大阪文化財研究』第27号，1-32頁，(財)大阪府文化財センター。
- 秋山浩三 2005b 「弥生大形集落断想(下)」『大阪文化財研究』第28号，1-30頁，(財)大阪府文化財センター。
- 梅木謙一 1991 「松山平野の弥生後期土器-編年試案-」『松山大学構内遺跡』松山市文化財調査報告書第20集，107-118頁，松山市教育委員会。
- 梅木謙一 1995 「西部瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談叢』34，143-158頁，九州古文化研究会。
- 梅木謙一 1996 「伊予」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会資料集，58-61頁。
- 梅木謙一 2000 「伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年-四国編-』，211-282頁，木耳社。
- 梅木謙一 2002a 「松山平野における弥生文成立期の様相」『究班』Ⅱ，63-72頁，埋蔵文化財研究会。
- 梅木謙一 2002b 「日本最古の鉄製鋤先の時期-松山市釈迦面山遺跡出土品の検討-」『田辺昭三先生古稀記念論文集』，39-52頁。
- 梅木謙一 2003 「松山平野の弥生時代中期集落について(Ⅰ)-松山市西野Ⅲ遺跡の再検討-」『愛媛考古学』15，18-41頁，愛媛考古学協会。
- 梅木謙一 2006 「分銅形土製品からみた基盤交流圏-出土の意義と地域間交流について」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』，95-145頁，日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会。
- 加島次郎 2007 「古墳時代初頭の超大型建物の立地と景観について」『東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地 樽味立添遺跡3次調査地 樽味高木遺跡7・8・9・11次調査地 樽味四反地遺跡7・8・9・11次調査地 枝松遺跡6次調査地』543-545頁，(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。
- 酒井龍一 1990 「拠点集落と弥生社会-拠点集落を基本要素とする社会構成の復元-」『日本村落史講座2 景観Ⅰ 原始・古代・中世』，65-83頁，雄山閣。
- 柴田昌児 2000a 「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年-四国編-』，283-366頁，木耳社。
- 柴田昌児 2000b 「四国西南部における弥生文化の成立過程-西南四国型甕の成立と背景-」『突帯文と遠賀川』，381-399頁，土器持寄会論文集刊行会。
- 柴田昌児 2002 「瀬戸内海麓南岸の弥生集落その1-中期後半丘陵性集落の動態-」『環瀬戸内海の考古学』，327-342頁，古代吉備研究会。
- 柴田昌児 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観10 遺構編』，315-330頁，小学館。
- 柴田昌児 2006a 「北四国(瀬戸内海南岸)地域における前・中期弥生集落の居住形態」『弥生集落の成立と展開』第

- 55 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集, 99-115 頁, 埋蔵文化財研究会。
- 柴田昌児 2006b 「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落－特に燧灘～伊予灘・安芸灘沿岸域を中心として－」『古代文化』58 (Ⅱ), 69-81 頁。
- 柴田昌児 2006c 「伊予における出現期古墳の様相」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』, 401-430 頁, 日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会。
- 柴田昌児 2008a 「今治平野における弥生社会の展開－その 1－」『地域・文化の考古学』, 99-124 頁, 下條信行先生退任記念論文集刊行会。
- 柴田昌児 2008b 「松山平野」『弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会』, 224-239 頁, 同成社。
- 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡第 2 次調査』, 137-150 頁, 松山市教育委員会。
- 下條信行 1994 「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『「社会科」学研究』第 28 号, 1-16 頁, 愛媛大学教育学部。
- 下條信行 1999 「松山市文京集落の性格と機能」『瀬戸内の弥生中期集落－その機能と構造の研究－』古代学協会四国支部第 13 回大会資料。
- 多賀茂治 1996 「第 4 章玉津田中遺跡の堅穴住居について」『玉津田中遺跡－第 6 分冊－総括編』, 339-358 頁, 兵庫県教育委員会。
- 田崎博之 1998 「文京遺跡の弥生集落」『文京遺跡シンポジウム資料集－弥生大集落の解明－』, 1-38 頁, 愛媛大学埋蔵文化財調査室。
- 田崎博之 2004 「土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究」平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金〈基礎研究 (C) (2)〉研究成果報告書。
- 田崎博之 2006 「四国・瀬戸内における弥生集落－愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落, 北部九州との比較－」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』, 17-44 頁, 日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会。
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』, 岩波書店。
- 寺沢薫 1998 「古墳時代の首長居館－階級と権力行使の場としての居館－」『古代学研究』141, 1-21 頁。
- 寺沢薫 2000 『王権誕生』日本の歴史 02, 講談社。
- 常磐 茂 2000 「松山市淡路峠付近の高地性遺跡」『遺跡』第 37 号, 29-36 頁, 遺跡発行会。
- 長井数秋 1977 「愛媛県土壇原北遺跡出土の弥生式土器」『ふたな』創刊号, 1-11 頁, 伊予考古学会。
- 長井数秋 1986 「土壇原Ⅵ (土壇原北) 遺跡」『松山市史料集』第二巻考古編Ⅱ, 165-169 頁, 松山市。
- 名本二六雄 2007 「土壇原北遺跡の「方格四孔文鏡」と墳墓群について」『愛媛考古学』18 号, 85-93 頁, 愛媛考古学協会。
- 平井幸弘 1989 「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『愛媛大学埋蔵文化財調査報告書Ⅰ鷹子・樽味遺跡の調査』, 61-75 頁, 愛媛大学埋蔵文化財調査室。
- 松村さを里 2008a 「伊予地域における弥生時代器台の分布と変遷」『地域・文化の考古学』, 125-140 頁, 下條信行先生退任記念論文集刊行会。
- 松村さを里 2008b 「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について－伊予地方を中心に－」『妙見山 1 号墳』, 335-355 頁, 愛媛大学考古学研究室・今治市教育委員会。
- 山崎謹哉 1986 「集落」『日本歴史地理用語辞典』, 269-270 頁, 柏書房。
- 吉田 広 2002 「武器形青銅器に見る帰属意識」『考古学研究』49 (3), 5-19 頁。
- 吉田 広 2003 「文京遺跡の弥生前期集落」『立命館大学考古学論集Ⅲ－1』, 567-572 頁, 立命館大学考古学論集刊行会。
- 吉田 広 2008a 「平形銅剣をめぐる諸問題」『地域・文化の考古学』, 255-272 頁, 下條信行先生退任記念論文集刊行会。
- 吉田 広 2008b 刊行予定 (未刊) 「遺物出土からみた文京遺跡の弥生集落」『兵知典君追悼論集 (仮称)』, 兵知典君追悼論集製作委員会。
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第 12 号, 35-54 頁, 日本考古学協会。
- 若林邦彦 2003 「基礎集団・遺跡群・弥生地域社会」『考古学に学ぶ』同志社考古学シリーズⅧ, 139-156 頁, 同志社考古学シリーズ刊行会。
- 和島誠一 1966 「弥生時代社会の構造」『日本の考古学』Ⅲ (弥生時代), 2-30 頁, 河出書房。
- 和島誠一・田中義昭 1966 「住居と集落」『日本の考古学』Ⅲ (弥生時代), 349-376 頁, 河出書房。

発掘調査報告書参考文献 (本文中に掲載した遺跡に限る)

伊予市教育委員会編 1993 『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書 (県営圃場整備事業伊予東地区富田池工区)』。

-
- 伊予市教育委員会編 2005 『行道山遺跡』。
- 愛媛県教育委員会編 1979 『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』。
- 愛媛県教育委員会編 1982 『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』。
- 愛媛県史編さん委員会編 1986 『愛媛県史<資料編考古>』, 愛媛県。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1989 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ 鷹子・樽味遺跡の調査』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1990 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 文京遺跡第8・9・11次調査』, 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1991 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ 文京遺跡第10次調査』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1993 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ 樽味遺跡Ⅱ - 樽味遺跡2次調査報告-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1995 『愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅴ 愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1997 『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ - 1987～1994年度における立会・試掘・確認調査成果の報告-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2003 『樽味遺跡Ⅳ - 樽味遺跡4次調査 - - 樽味遺跡5次調査 - - 桑原西稲葉遺跡3～5次(北吉井団地)調査-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1997 『樽味遺跡Ⅲ - 樽味遺跡3次調査報告-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2001 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 1995・1996年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2002 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 1997・1998年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2003 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 1999・2000年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2004 『文京遺跡Ⅲ - 文京遺跡13次調査報告-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2004 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 2001・2002年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2005 『文京遺跡Ⅳ - 文京遺跡20次調査 - - 文京遺跡23次調査-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2005 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 2003年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2006 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 2004年度-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2007 『文京遺跡Ⅴ - 文京遺跡18次調査報告-』。
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 2007 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 2005年度-』。
- 川内町教育委員会編 1989 『宝泉遺跡Ⅰ 県営圃場整備事業(川内北地区)埋蔵文化財調査報告書』。
- 川内町教育委員会編 1990 『宝泉遺跡Ⅱ 県営圃場整備事業(川内北地区)埋蔵文化財調査報告書』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1980 『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1986 『宮前川遺跡 中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1993 『麻生小学校南遺跡埋蔵文化財調査報告書』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995 『持田町3丁目遺跡』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995 『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XⅠ - 伊予市編Ⅰ』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1996 『若草町遺跡Ⅱ 松山第2合同庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告書』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1999 『愛比売 平成7～10年度年報』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002 『土居窪遺跡2次 祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡2次 - 都市計画道路道後祝谷線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002 『道後町遺跡 - 都市計画道路東一万道後線(道後工区)整備に伴う埋蔵文化財調査報告書-』。
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2005 『道後町遺跡Ⅱ - 都市計画道路東一万道後線(道後工区)整備に伴う埋蔵文化財調査報告書-』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992 『桑原地区の遺跡 樽味立添・樽味高木・樽味四反地・桑原西稲葉1・2次・桑原田中・経石山古墳・枝松3次』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992 『文京遺跡 - 第2・3・5次調査-』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992 『朝美澤遺跡・辻町遺跡』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992 『道後城北遺跡群 文京4次・道後今市6次・8次・道後樋又2次・祝谷本村』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 平成3年度』。
- (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1993 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ 平成4年度』。
-

- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1993『和気・堀江の遺跡 座拝坂・金毘羅山・船ヶ谷三ツ石古墳』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1994『石井幼稚園遺跡 南中学校構内遺跡-2次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1994『斎院の遺跡 北斎院地内 斎院烏山』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1994『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ 平成5年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1994『来住・久米地区の遺跡Ⅱ 来住廃寺18・20次 久米窪田森元3次』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1994『桑原地区の遺跡Ⅱ 樽味高木2・3次・樽味四反地2・3・4次・桑原田中2次』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1995『大峰ヶ台遺跡-第4次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1995『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ 平成6年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1996『東本遺跡4次調査 枝松遺跡4次調査』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1996『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ 平成7年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1997『釜ノ口遺跡Ⅱ-6・7・8次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1997『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ 平成8年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1998『朝日谷2号墳』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1998『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ 平成9年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1999『岩崎遺跡』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1999『松山市埋蔵文化財調査年報11 平成10年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2000『大淵遺跡-1・2次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2001『松山市埋蔵文化財調査年報12 平成11年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2001『斎院の遺跡Ⅱ 鳥越 津田中学校構内 北斎院地内』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2001『松山市埋蔵文化財調査年報13 平成12年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2002『桑原地区の遺跡Ⅳ 桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡 東野お茶屋台遺跡1次・2次・3次』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2002『樽味四反地遺跡-5次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2003『久米高畑遺跡-25次調査-』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2003『松山市埋蔵文化財調査年報14 平成13年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2004『松山市埋蔵文化財調査年報15 平成14年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2004『松山市埋蔵文化財調査年報16 平成15年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2005『松山市埋蔵文化財調査年報17 平成16年度』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2006『東石井遺跡 西石井遺跡 -1・2・3次調査地』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2006『松山市埋蔵文化財調査年報18 平成17年度』, 松山市教育委員会(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2007『鶴が峠遺跡Ⅰ』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2007『東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地 樽味立添遺跡3次調査地 樽味高木遺跡7・8・9・11次調査地 樽味四反地遺跡7・8・9・11次調査地 枝松遺跡6次調査地 市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2007『松山市埋蔵文化財調査年報19 平成18年度』, 松山市教育委員会(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。
- (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2008『鶴が峠遺跡Ⅱ』。
- 砥部町教育委員会編 1978『高尾田遺跡-麻生小学校新增築地区発掘調査報告書-』。
- 砥部町教育委員会編 1990『三角遺跡第Ⅲ調査区・水満田遺跡第Ⅴ調査区』。
- 砥部町教育委員会編 1991『水満田遺跡調査報告書 (第6・7次調査)』。
- 砥部町教育委員会編 1993『水満田遺跡第8次調査 麻生小学校南遺跡第2次調査』。
- 砥部町教育委員会編 1995『麻生小学校南遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書 第3次調査・第4次調査・第5次調査』。
- 砥部町教育委員会編 2001『砥部町麻生小学校南遺跡砥部町拾町山遺跡発掘調査報告書』。
- 松前町教育委員会編 1992『横田遺跡 伊予地区コントリーエレベーター建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』。
- 松前町教育委員会編 1995『横田遺跡第Ⅲ区調査報告書』。

-
- 松前町教育委員会編 2003 『松前町横田遺跡Ⅳ区調査報告書』。
松山市教育委員会編 1973 『天山・櫻谷遺跡発掘報告書』。
松山市教育委員会編 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』。
松山市教育委員会編 1976 『文京遺跡』。
松山市教育委員会編 1979 『来住廃寺』。
松山市教育委員会編 1981 『浮穴遺跡・西石井荒神堂遺跡・東本Ⅱ遺跡・東本Ⅲ遺跡・桑原高井遺跡』。
松山市教育委員会編 1987 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ 昭和60～61年度』。
松山市教育委員会編 1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 昭和62～63年度』。
松山市教育委員会編 2003 『樽味四反地遺跡－6次調査－弥生時代～古墳時代初頭編』。
松山市史編集委員会編 1986 『松山市史料集』第二巻考古編Ⅱ，松山市。
松山市立埋蔵文化財センター編 1991 『祝谷六丁場遺跡－調査報告1－』。
松山市立埋蔵文化財センター編 1991 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 平成元年～2年度』。

挿図・表出典

- 図1・2・5・7・9・11～14・16：柴田作成
図3・10：柴田2008b
図4・6：柴田2008bを加筆
図8：愛媛大学埋蔵文化財調査室提供図面を元に柴田作成
図15：加島2007を元に柴田作成

(愛媛県埋蔵文化財調査センター，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理，2008年12月5日審査終了)

The Development of Yayoi Society in Matsuyama Plain

SHIBATA Shoji

Through an examination of the dynamics of Yayoi settlements, this paper sheds light on their aspects and characteristics with the aim of reconstructing the development of Yayoi society on the Matsuyama Plain in western Setouchi. By studying the process of the formation of the Bunkyo Site, which was a congested large-scale base settlement, and the Kume Site complex, centered on the Tarumishitanji Site with its chiefly residence, it examines group relationships within Yayoi society on the Matsuyama Plain and the dynamics of the chief class as it made the transition to Kofun society.

First, the author looked at Yayoi archeological sites that form one part of our understanding of the concept of “settlement” as an expression of the space in which humans go about their daily lives. Next was the designation of “site complex” distributed across a defined area amongst the topographical completeness of rivers and fan-shaped land. Eight Site complexes on the Matsuyama Plain were chosen for this study.

Yayoi settlements appeared in coastal regions in the beginning of Early Yayoi. There are more sites dating from the end of Early Yayoi through the early part of Middle Yayoi, some of which were moated settlements. Settlements dating from late Middle Yayoi have been confirmed at all of the sites, including the Bunkyo Site within the Dogojohoku Site complex.

The Bunkyo Site, with its structure of segmented living spaces, was a congested large-scale base settlement formed by the coexistence of groups with different origins. Persons of chiefly rank who resided within the settlement traded with communities to the west, mainly northern Kyushu. They obtained prestigious items and production goods and engaged in the production of metal implements and glass products within the settlement. It is thought that they interacted and traded with Setouchi communities to the east through participation in communal worship centering on flat copper swords.

In late Middle Yayoi, the settlement at the Bunkyo Site suddenly disbanded and the group was restructured. Then in the latter half of Late Yayoi, a local community with a new system of social stratification appeared at the Kume Site complex where there were separate a chiefly residence. Yayoi settlements in Late Yayoi society that had disbanded and restructured created an “area of bond” consisting of several local communities as typified by the Kume Site complex. They built a foundation for a local community in the Matsuyama Plain with a particular chief at the top, and formed a community group that was a single unit that is associated with the formation of chiefly graves in the first half of the Kofun period.

Key words : Yayoi settlement, Site complex, Congested large-scale base settlement, Chiefly residence, Area of bond
